

俳句雜誌

令和三年五月一日発行（毎月一日発行）通巻第九十四卷第五号

水 明

2021 5月号



《今月のかな女》

松五六本五月の山の草の丈

(句集『龍膽』)

長谷川かな女

かな女が登ったとすれば、せいぜい二三百坪の小山で、街並みを一望できる場所ではなからうか。そこに松の木が五六本生えていて、成長した青草がそれを取り巻いているという。芝居のト書のような俳句である。「五」のリフレインと、ト書の説明が、気持よさげに寛いでいるかな女の姿を映し出している。

(鬼之介・註)

— 華の一句 —

指切りの指の湿りや春の闇

石井喜恵

この艶のある俳句に、眼がびたりと止まった。季語が発する雰囲気を思えば、当然そこに男女の姿が浮かんでくる。二人の年齢と歳の差、歳は男が上かそれとも女か、などなど人物像を頭に描きながら句の深部へ入り込む。指の湿りは兩人の気持の高揚であり、約束の中身を知るのは春の闇である。

(鬼之介・推薦)

水明

令和3年

5月号

華の一句

巨船(作品)

巢立鳥(近詠)

儘に(近詠)

冠木門 主作品の鑑賞

硯箱 季音月評

季音「雪」(同人作品)

季音「月」(同人作品)

季音「花」(同人作品)

『水明誌』を繙く

現代俳句鑑賞

発表

令和三年 水明賞

令和三年 季音賞

令和三年 かな女賞

令和三年 新珠賞

山本鬼之介

西山貴美子

茂木和子

境延昭

井口俊晴

永野史代
波多野寿子
西山貴美子
ほか

小倉倭子
森本早苗
柚木治子
ほか

井上玲子
近藤徹平
正木萬蝶
ほか

大石雄鬼
網野月を



四 賞

選考経過
受賞のことば
新珠賞選考経過

新季音同人発表

水明集

横山君夫 渋谷きいち
西幅公子 ほか

水明集作品評

山本鬼之介

水琴窟 (水明集三月号鑑賞)

池田雅夫

山紫集

鼓笛集 (同人作品)・私の一句

俳誌望見

梅澤佐江

句集喝采

近藤徹平

春の吟行会の記

曲淵徹男

水明例会報・各地句会報

88

全国大会のお知らせ

91

全国大会兼題句募集

97

風声・水明発展基金御礼

98

後記

100

題字：長谷川かな女 表紙：内田恵子 カット：福田千春

巨船

山本鬼之介

来る来ないあきらめかけて春の虹

淡淡と来し方語る万愚節

花鳥賊に酔うて秘伝の隠し芸

花吹雪ビッグシップの船出かな
風光る水くろがねの厩橋
本懐を遂げし刀ぞ春の闇
囀やプリマ・ドンナの休養日
鼓笛隊進む林道みどりの日

巢立鳥

西山 貴美子

来歴なんぞ知らぬ存ぜぬ巢立鳥
春嵐ゆくらくらくと笹小舟
今生の別れは白し沈丁花
花は葉に泡沫^{うた}人と歩を合はす
門葉の額ちらほらと余花の道
古筆見の帽を真深に春の暮
辻駕籠に乗せてもみたし巢立鳥

「撃ちてし止まむ」この言葉を聞きながら育った。戦時中だったので標語とばかり思っていたが、実は日本の古い言葉と知ってから、この言葉に心奪われるようになっていく。年甲斐もなく浦和レッズファンである。サポーターになるにはテーマが必要だが、「撃ちてし…」は今時御法度と言われた。言葉の間違えると袋叩きにあう世の中だが、もう少し長生きしたいと思っている。東大寺のお水取りも終り春爛となつた。

儘に

茂木和子

音もなく雨の予感の春の闇
球根を植ゑて足したる一杯土
ひかりの糸に引かれ椿の落ちにけり
とりあへず白磁の皿に落椿
椿落つ耳朶の弾力保ちつつ
蒲公英百事態宣言解除後
舶来のワクチンを待つ山椒の芽

令和元年水明全国大会の折、お祝として胡蝶蘭の見事な鉢を頂いた。大会終了後はしばらくの間、発行所でお世話する事になった。発行所に入りする方には褒められたり句会では席題にも取り上げて頂いた。その後、この鉢は私が頂いて育てる事になった。この鉢の中には三つの株がぎゅっと詰めて入れられていたので、その株を一鉢ずつに分けて植え替えた。その三株の蘭が昨年の十二月頃から花芽を一本ずつ出した。その一本ずつの花芽に今年五つから六つピンクの蕾が付いた。その三鉢の蕾が全開、十七の花が満開。その花の明るさで家の中が眩しい。コロナ禍の中で至福の日々を過している。

冠木門

● 主宰作品の鑑賞

境延昭

二月号

着ぶくれの男児乗り込む女性専用車

着ぶくれと言えば老人か田舎育ちを想つてしまふ。上京して驚いたことの一つが冬の男児の半ズボンであった。田舎に女性専用車などは無い。親の転勤などで都会に移り住んだ田舎育ちの男児の戸惑いが目に浮かぶ。男児と言うからは小学高学年か中学低学年、まだ女性の魔性は知らないまでもその次元の違う空間への驚きの感情は後々まで残つた筈である。

金屏風はこぶ見習ひホテルマン

水明の毎年の全国大会の会場は浦和のホテル、その宴会部に厄介になっている。先ず参加者の座席を設えて案内板、吊り看板の取り付けを待つて金屏風が運び込まれる。演台の盛花が置かれて会場準備が終了する。盛花は花屋の持ち場、宴会部のホテルマンにとって金屏風は特別のもののである。

盛衰のむかしが宿る冬座敷

栄華を極めた頃に建てられた邸宅もやがて斜陽の時節を迎

える。記念館などとして活用されても人の住まいでなくなる。建具の引手や長押の釘隠しなど贅を尽くした金具などにくすみを隠せなくなる。冬座敷の季節感がびたりと決まり動かない。横浜金沢の伊藤博文別邸が大磯の吉田茂の旧宅など政治家の屋敷が胸に浮かぶ。

日向ぼこ運命線が延びてをり

世には手相学なるものが有るといふ。クラブのママなどに手相や姓名判断に凝る人が多かった。その中にバブルの直前に見切りを付け店を売り払った人も居た。あながち予見力を否定はしないがその手の話には興味が無い。しかし日向ぼこで運命線が延びる気分には全く依存が無い。

荒行の火の粉の行方冬の月

修験僧の荒行か。火を焚き未だ真つ赤に残つた熾火の上を素足で歩く行の様子をテレビで見た事がある。神仏の御利益や功德を信じないものには狂気に映る。心頭滅却すれば火も涼しの偈のように涼しく感じるとは到底思えない。

この句の現実感を不思議に思う。俳句には厳しい作者だが

荒行の似合う人ではない。中七の措辞の具象と季語「冬の月」の斡旋の効果であろう。

三月号

歩調にも老いの一徹下萌えを

前方の一点を見つめ足よりも肩が先に出る。様子が見え失笑してしまふ。「一徹」は好きな言葉、人の魅力でもある。しかし慣用語となると「頑固一徹」「一徹者」など負のイメージが付き纏う。句の「老いの一徹」も然り。その上での諧謔である。季語の選択と助詞「を」の効果に注目する。

浅春や祇園甲部の夕景色

五つ在る京都の花街の中、祇園甲部は最も大きく有名である。春の風物「都をどり」は此処甲部歌舞練場が会場となる。すぐ近くに夏の祇園祭「山鉾巡行」の八坂神社もあり、京都で最も華やかな場所である。その京都の浅春は未だ底冷えが残る。どのような夕景色だろうか。春の踊りを直前に稽古帰りの舞妓、お座敷へ急ぐ芸妓など想像してみる。

京の街が好きかな作者。先斗町の弁柄格子が似合いそうだ。

別詠への花簪にある余寒

別詠へとは何とも懐かしい。今流で言えば特別注文、洋服等は詠えが普通であった。今はドレスの類ですらオートクチュ

ユールなる既製服に席捲されている。腕の良い細工人に特別に注文して作った花簪、花を彫り込んだ鼈甲造りに違いない。その鼈甲もワシントン条約により輸入禁止となった。少々年季の入った芸妓であろう。季語の「余寒」により、少し前の時代にスリッパし愛惜の気分がある。

春菊がブランド牛を連れてくる

春菊と言えはすき焼、人形町の日山、湯島の江知勝或いは浅草の今半など下町の店が良い。脂の入った高級肉を競うようになり、松坂や神戸など産地の多くがブランド化された。九州育ちには割り下で煮る東京のすき焼には違和感がある。すき焼は田舎風が良い。十分に熱した鉄鍋に先ず脂身を焼きその油脂の中に肉を入れ砂糖と醤油で味を作る。その香りと音がすき焼の醍醐味であった。肉は赤肉で十分、とろとろになった脂身を奪い合って食べた。

小鉢に水菜わりない仲になる夕べ

「わりない仲」に注目する。ほんなりした語感に上方特有の言葉と思想が辞書にもある。表記は「理無い」、幾つかの説明に「懇ろ」、その中に「男女がひそかに情を通じ合うこと」とあり納得。埋もれかかった言葉の発掘、それが無理なく句に生き返っている。水菜の小鉢から飛躍する発想と共に作者ならではの一句である。

小鉢の水菜でわりない仲になってみたいものである。

硯箱

◆季音二月

井口俊晴

二日はや嘴太鴉に喝くらふ

西山貴美子

正月二日早々から、鴉のカー公に大声でカーカー叫ばれた
というのである。それを「喝」をくらったとユーモラスに表
現した。鴉には二種類あり、嘴が太くて大きいハシブトと、
小さくて細いハシボンがいる。作者が叱り飛ばされたのはハ
シブトの方で、都会で見かけるのはたいいこつちである。
餌は肉食系で、草食系のハシボンに比べると気性も荒っぽい。
ゴミの集積場を荒らすので憎まれ者でもある。おめでたい日
に、こんな奴に怒鳴られたのだから気の毒である。

段取りはすべて承知やサンタクロース

石井喜恵

クリスマススイブに、トナカイが曳く橇に乗って家々を回る
サンタさん。煤だらけの煙突をくぐり、よい子が眠っている
間にプレゼントを置いて行く。枕元とか靴下とか、段取りは
すべて承知……。だが、待てよ。サンタさんは誰？　そう、サ

ンタさんは子供たちのお父さん。そんなことは小さい子でも
知っているのに、みんなで知らないふりをしている。イブの
段取りは誰もが承知のことなのである。

雪こんこ一人の家に古時計

大村節代

「雪やこんこ霰やこんこ」という文部省唱歌を覚えていま
すか。調べたら、作詞者・作曲者ともに不詳とありました。
また「こんこ」の意味・語源は諸説あつて、本当のところは
分からないのだとか。とにかく雪はいっこうに止みそうにな
い。ガラス窓越しに、白くなっていく外の様子を眺めていた
ら、古い柱時計が刻むコツコツという音に気付く。独りぼつ
ちだということ、これほど身に染みて感じるとは。

ルバイヤート読んで寒さの募る夜

栢尾さく子

ルバイヤート、青春時代に呼んだベルシヤの哲学者で詩人、
オマル・ハイヤームの詩集。私も本棚から埃を被った岩波文

庫版のルバイヤート（小川亮作訳）を取り出した。「もともと無理やりつれ出された世界なんだ、生きてなやみのほか得るところ何があったか？」と、厭世観に満ちた四行詩が綴られている。冬の夜に独りで読むには、懐かしさを通り越して寂しく、寒さがこたえたことだろう。

天井の染みは妖怪風邪籠り 川崎道子

油断して風邪をひいてしまった。大したことはないが、少しばかり熱があるので、布団を敷き昼間から横になっている。うつらうつらして天井を眺めていると、なんと意外なことに飽きないのである。古くなった天井板の染みがいろんな形に見える。始めのうちは地図か何かのようだったのが、ナマズのお化けに見えたり、あの妖怪アマビエに見えてくるのだ。ゆっくり休んで早く良くなりますように。

冬椿真つ赤な帽子の六地藏 荒井俱子

いつもの散歩コースに赤い椿の花が咲いている。寒い日でも、この花には何かほっとする温かさがある。傍らには六体の石のお地藏さん。手を合わせ合掌していたり、錫杖を突いていたり、あるいは念珠を持っているが、みんな赤い帽子（頭巾）をかぶっている。お地藏さんが「子供を守る仏様」とし

て信仰されてきたからだと言われるが、何より赤は「魔除け」の意味があるためらしい。それに、何となく可愛いじゃありませんか。

着ぶくれて紐の結べぬスニーカー 石田慶子

寒い、なんて寒いんだ。セーター、その上からダウンのコートを着て、モコモコになって玄関に出たワタシ。いざスニーカーの紐を結ぼうと屈み込んだが、お腹のあたりが邪魔になって手が届かない。最近体重が増えているのに、朝ご飯を食べすぎたのがいけなかった。とにかく内臓が圧迫されるようで苦しい。にやにや笑っているけれど、気を付けないと、アナタだってそうなりますよ。

散歩する犬は春着でしゆくしゆくと 後藤綾子

犬は散歩が大好きである。人間と同じで、家の中に一日中いると気が滅入ってしまうからだ。ちょっと言い過ぎかもしれないが、食事よりも散歩の方が嬉しいと言いかもしれない。お日様が気持ちよい冬晴れの日、ご主人に連れられて街に出た。先日行きつけのペットショップで買ってもらった春着を着て、すまして歩いて行く。「しゆくしゆくと」という言葉に愛犬の喜びがあふれている。

季
音
雪



春の夢 永野史代

うぐひすやトロッコ進む森の奥
心の扉開かれるやう初音かな
下萌や夫婦揃ひのスニーカー
亡母の顔かすかに笑ふ春障子
眼裏に黒揚羽棲む春の夢

春の雷 西山貴美子

きりもなく砂積む遊び春の雷
頓狂な声のあとさき春の雷
密葬の言葉みじかし沈丁花
余寒なほ収骨の箸順送り
仲春や鳩の足跡ちらばらと

梅 月 夜 波多野 寿子

暮れてなほ白梅凜と咲きほこる
まなうらに師の面影が椿咲く
相弟子とかけ合ふ琴や光悦忌
空蒼く飛び立つ構へこぶし咲く
赤石の縞を照らして梅月夜

地産地消 星野和葉

陳列のうぐひす餅に季を覚ゆ
声は空耳飛んでみたいか鶯餅
桜東風新築家屋見る二人
雲雀東風地産地消の市歩く
相向かひ羽びんびんと鶴の舞

風 茂木和子

ジヨギングの軽き疲れや雲雀東風
東風吹きて古への人想はるる
幹太く長たる風情家桜
耕人を夕日バックに写しけり
耕人のときどき天を仰ぎ見る

桜 貝 矢作水尾

秩父路の空押し上げて木の芽出づ
海光の今朝の華やぎ初桜
桜貝波の工房より生れし
金婚のグラスに添へて桜貝
月おぼろ舫ふ木の船鉄の船

蓬 餅 山中 みどり

銀燭の如き花芽や夕辛夷
昂りを空に放てり花辛夷
下町の粹は死語なり蜆汁
木の鉢に漬す蓬の深緑
捏ね鉢は母の形見や蓬餅

春日 傘 由良 ゆら女

冴返る窓辺に小さき蛾のむくろ
近ぢかと生駒山稜青き踏む
かたかごの花は前髪上げ初めて
春日傘標本木はまだ眠い
兎に角もけふは健やか鳳蓮草

三 月 吉住 光 弥

しづしづとやがて脱兎の三月来
三月や納屋の鋤鉄ひかりだす
耕^{ながし}人^{びと}先づは畏敬を天と地に
風が来て日が来てやさし猫柳
春点茶茶筌擦過の音に韻

失 恋 網野 月 を

山笑ふつられて空と海と君
逃げつぷりは中の下なるや蛙の子
昨日と明日どちらが重い花菜道
初蝶や両の手ひらき逃がしやる
初蝶やハッピーエンド願ひけり

指切り 石井喜恵

子安貝 大橋廸代

指切りの指の湿りや春の闇
草餅の窪みの冷えや夜の雨
鶯や指でなぞりし道しるべ
水温むゆつくり解く手の繃帯
水温むしばし櫓を止む渡し船

潮騒や女神に手向く子安貝
天心ではたと啼きやむ揚雲雀
青き踏む悪女よ仮面捨てちまへ
法螺貝に耳のみ向くる春の鹿
日永夫いどむ数独星五つ

東風 石山かつ子

針すすむ 大村節代

白梅やここだくしづか妻社
梅東風や秘仏といへど石一つ
夕東風やきしきしきしと舟だまり
傘かはす今小町かも春の雨
地味なれど瓜実顔の古今雛

購入の古書に訓点春めけり
不発弾島に残して鳥帰る
分校の生徒万歳鳥帰る
来世見る眼鏡に歪み春の山
春雷やダリの時計の針すすむ

永き日 栢尾 さく子

木曾街道 五明 昇

哲学の眸をライオンもする日永
コロナ禍や赤子泣くたび退る春
永き日をアマビエ画いて眠りし子
鶯ぶるぶる雨と気づいて昇天す
コロナ禍を論議している蝌蚪の群れ

春めくや雨に膨らむ雑木山
甘味苦味香味ほのかに露の臺
靈峰を馬手に弓手に耕耘機
お日柄も良しと鶯正調に
木曾馬の高き嘶き山笑ふ

種 袋 菊池 ひろこ

逆 回 り 境 延 昭

糞や城の搦手動きあり
デイスタンス・エヴィデンスとや黄砂ふる
木流しやマスクはづさぬど根性
奥入瀬の飛沫とどけり葦草
胃痛ある日向の端の種袋

梅東風や園の巡路を逆回り
よろめきの昭和のドラマ春炬燵
露の臺けふはいいこと屹度ある
晩節や膝に子猫を抱く平和
春の雷書斎のドアが開いてゐる

大地より 椎野美代子

春の雪 鈴木康世

三月の竹人形の節光る
三月の樹の瘤かな女の鬢に似て
水音の三月聴きに山毛櫟林
三月来くつくつ笑ふ酵母菌
三月の音声あらば大地より

稚児の笑み一つこぼれて春の雪
春の雪字余りの如庭に舞ふ
京菓子の薄紙はがす春の雪
春の雪文庫一冊読む間
涙あと残る文読む春の雪

菜の花 島津初花

春一番 田寺玲子

菜の花や花粉塗れの夕月夜
身仕度に口紅薄く桜餅
桜餅ほど良き塩味生かされて
黄砂降り別れて募る夫の背中
寝る子に彼岸団子の淡き色

桜鯛へ移り糶声いちだんと
青き踏む光源氏のゆかり径
羨道の堅き礎 春疾風
春愁やダムに沈める木地師村
泊船のきしむ纜 春一番

季音月

望郷 小倉倭子

風に聴く社の雅楽月おほろ
桜東風翁と出逢ふ百代橋
望郷の江戸の端くれ春の虹
甍るや黄ばむアルバム繰る往時
鬱の日のコーヒータム繰るもり

古刀 柚木治子

春雷や回り舞台の奈落まで
能のシテ振り向きざまに春の雷
春雷や陶土削ぎ切る古刀
再会を約する一喝春の雷
遠ざかる後ろ髪引く春の雷

青き踏む 森本早苗

姫路城視野に残して青き踏む
入山料「草引き十本」青き踏む
市長像けふも美男子桜五分
永永無窮露出断層春疾風
木蓮の精根尽きて仕舞ひけり

青き踏む 十倉和子

朱雀門見えぬて遠し青き踏む
ブルーメラン戻らぬ宮址青き踏む
すぐそこに法起寺の塔青き踏む
猿石も亀石も謎青き踏む
陽炎に子を見失ふ石舞台

春の雪 藤澤喜久

はるかより追伸と云ふ春の雪
春の雪江戸百景の版画めく
花辛夷影さわさわと駐在所
揚雲雀チュチュ着る乙女の幻想曲
ピアフの巷ミモザ烟れる港町

春の服 高島寛治

スキップの姉妹揃ひの春の服
三月来雑木林は鹿毛色に
風光る水の匂ひのとんぼ玉
陽炎に思ひ巡らす故郷かな
陽炎や宛先不明で書が戻る

春雷 大場順子

三月来勾玉色の風連れて
戒壇廻り出れば明るき春の雪
秘仏今現世に出でかぎろへり
春雷やふと蘇る女優の名
春雷の後や衣桁の晴れ衣裳

予約席 丸山マスマ

囀や谷に迫り出す予約席
花辛夷里曲抜ける雨意の風
点点と波の置きゆく桜貝
古代史の謎に疲れて蜆汁
三月や文机の向き変へてみる

春満月 森田祥絵

集落は呼び合ふ距離に春の雪
牡丹雪「文芸春秋」持ち重り
門の内見母の衣のしづごころ
浮かび出て水輪重なる春の鳩
自粛せるスローライフや春満月

木の芽 松宮保人

舟小屋の崩れしままや梅の花
一塊の粉塵となる残る雪
春の雪蹴散らし猫の喧嘩かな
仲春や古刹めぐりは胸の中
百歳の盆栽凍と木の芽張る

心の灯 原田想子

探梅の声をつなぎて里歩く
心の灯ともせし遣句集春の宵
親鳥の巣立ち促す声の艶
春場所や鬻まだ結へぬ勝ち名乗り
好返球本墨憤死春の土

春霞 森川義子

浅春や番の鳩の睦み声
木の芽晴重たくなりし赤子抱く
花守の今日締めくくる一人酒
持ち寄りて弾む会話や嫁菜飯
高階の視野に堂塔春霞

お福雛 山田美佐尾

東風吹くや孟宗竹の立ち向ふ
煙草屋の店先飾るお福雛
石段の雛の千体ぢりふ拝みて
春淡し窓越に聴く「早春賦」
ゴンドラや魔法が解けて芽吹く山

懸想文 荒井俱子

二合半の酒の肴は露の臺
春めきて塞ぎの虫が去る気配
震へつつ吠ゆる小犬や春の雷
車座も儘ならぬ世や花万朶
懸想文残して君は春星に

伊吹山 宇田白鷺

目借時秋華にともすろう花かな
雄鶏の声あればこそ春の朝
知らぬ間に乙女の笑みや卒業期
仲春や白々と立つ伊吹山
敗戦のあきらかなりし恋の猫

甘党 鳥羽和風

生きてれば母は百歳蓬餅
桜餅背伸びするにも医者いしやの許可
わらび餅こぼれ黄粉を拾ふ指
花見団子清水焼の皿二枚
名水に芯まで冷えて葛饅頭

青表紙 池田雅夫

青天に躍りだす旗花の茶屋
春暁の雲刻刻と青紫
青やかな牧存分に仔馬駈け
青麦の列一様に風の向き
春宵ややをら繻く青表紙

春のかげ 渡辺 舍人

彼岸講經文會かひを帯びて来る
蝶飛べるちゝはゝの径とは知らず
伝言板に生まれし恋よ梅見行
春日遅々蜂蜜移せばとつふんと
春へ射る所作美しければ怖からず

米 寿 霜中冬至

宿命は耕しと受け野良にあり
自適なる晴耕雨読米寿なる
混迷のきらめいてゐる春の雨
煮えきらぬ国会中継春半ば
仲春や昭和の唄が起て来る

木の芽時 井関 礼子

雨に陽に誘はれつつ木の芽吹く
木の芽張る季を伺ひつ日を追ひて
気儘なる狭庭もやをら木の芽時
雨待つは人のみならず木の芽時
木の芽張る声無き声の漲りて

燕 川崎 道子

劍豪の墓前に德利燕来る
明日は雨肩すれすれに夕燕
釣具屋の幟裏文字春一番
宙吊りの鯨の骨格風光る
蛇穴を出て音程をはづす笛

桜さくら 町野 広子

一人で愛づる今年の桜坂の町
煮浸しの出汁の旨み花の昼
開花宣言夫の好みの魚を煮る
桜さくら米寿を祝ふ家族の輪
この国に生れし幸せ花の宴

三 月 内田 恵子

手を拵げ羽搏くポーズ三月来
6Bで描く裸婦像春動く
野を焼きて埴輪ぽつかりまある目
大判の春シヨールは黒魔女心地
マジシャンの手足ひらひら春の街

春 雷 岡野 順子

生垣の葉つばと松に春の雷
指の先この一点に春の雷
春の雷この地点ではビルの中
春雷やビルに駆け込みほつとせり
春雷や手を握り合ふ親子かな

マリオネット 伊藤 敦子

飛べぬ子の着地のポーズ日脚のぶ
春一番ドミノ倒しに自転車
恋猫の二階の窓より脱走す
ジーンズの穴吹き抜ける彼岸西風
踏青やマリオネットの弾む脚

☆ ☆

特集 自画像としての俳句

特別企画 ネット句会のいま

巻頭作品10句

太田土男・小川軽舟・権 未知子
如月真菜・栗田やすし・坂本宮尾
深沢暁子・増成栗人

俳壇

6月号

5月14日発売
定価900円(税込)

巻頭エッセイ
上野 誠

八木健選 滑稽俳壇

四季巡詠33句【第II期】：山本一步・田口紅子

ものがたりのある俳句……………高柳克弘

いきもの歳時記……………角谷昌子

俳句史を見直す……………秋尾 敏

続々日本の樹木十二選……………広渡敬雄

俳壇史エピソード……………坂口昌弘

思想としての虚子……………中村雅樹

連載

俳句と随想12か月 菅野孝夫・柴田多鶴子

本阿弥書店

〒101-0064 東京都千代田区神田猿蓑町2-1-8 三恵ビル 電話03 (3294) 7068 振替00100-5-164430

季音花

春の雪 井上玲子

春の雪別れの言葉まなざしに
春雨やささやき初むる庭の木々
足裏より強き土の香下萌ゆる
木の芽張る樹海の息吹満身に
万葉の歌碑の傍へに花董

空耳 正木萬蝶

艶福の夫のこまごま春の雪
産土の恋の色なり草青む
「考える人」の思惑羅ぐもり
亡国の音おんの空耳おん羅ぐもり
夢の中に遊ぶ妖精春の風邪

辻社 近藤徹平

濃紅梅マンション街の辻社
初虹の見ゆる独房格子窓
燕来る朝縁側の雑記帳
木の芽風白いドレスのブーケトス
草千里天地を焦がす野焼の火

春の虹 梅澤佐江

北の果軋み哭きつつ流水来
うたかたの消えては生まれ水温む
文を読む木の芽起しの静けき夜
桜東風ともづな解かれたる和船
大東京を束の間抱き春の虹

春の風 松井由紀子

調律の仕上げはカノン二月尽
あどけなき鶯あやふき枝移り
百翁の笑ふてばかり春の風
菜の花や初子抱く子の里帰り
三月やおおふくろといふ涙壺

春

井口俊晴

三姉妹こいさんどの子露の臺
シヤツのボタン一つ外して春兆す
つちふるや恐竜騒ぐゴビ砂漠
コロナ禍の家居の砦春炬燵
満開より七分に風情花の里

土筆野

野口和子

春昼や犬と話して郵便夫
菜の花や遠く線路の軋む音
綺羅星のごと春蘭の咲初めり
芽吹き山いよとんびの輪の中に
つくしんぼ突き突かれ犬の鼻

堇草

宮崎チアキ

春雷の紛れこみたる街明かり
欄干の影ゆるやかに水温む
相生の松の根方や堇草
パンジーをワイングラスに飾る夜
天界に欲しき砦よ霾ぐもり

木の芽

大塚茂子

疵武甲無数の木の芽癒す雨
浅黄立ち熊野古道の名の木の芽
花こぶし清浄なりて空占むる
苗木買ふあと十年は生きねばと
囀や本曲輪跡しきり鳴く

辛夷咲く

飛永鼓

残雪の山壁に見る居場所かな
大空に高らか謳ふ花辛夷
辛夷咲く我が胸中に緩みあり
菜の花の中に村あり人のあり
菜の花や蝶と舞ひたし遊びたし

春寒し

西浦千枝子

踏青や遂に学舎廢校に
何も飾らぬ新装の部屋春寒し
散りてなほ色深めたる紅椿
忌の膳に食欲そそる初蕨
彼岸会終へ各停電車待つ一人

色いろいろ

河野 はるみ

萌葱色日ごと其方此方木の芽道
長崎はからすみ色よ黄砂来る
銀行に霾は積もれど貯蓄0
満点も0点もなし春うらら
酒盛の締は吸物木の芽入り

霾

石田慶子

霾や多肉植物越しの窓
黄砂来る入国禁止の御触れなく
古ぼけし鏡台に置くひなあられ
エコバックに押しこむ上着春暑し
スマホ越し友の町にも春の雷

国境線

福田千春

霾るや人は留まる国境線
地球儀に増えゆく赤よ霾れり
木の芽和つい一献の妻若し
相づちを聞けぬが悲し月朧
祖母よりの播粉木三寸木の芽和

落の臺

菅原知子

わたくしの秘密の小道落の臺
播粉木は太くていびつ木の芽和
つちふるや並木通りの三丁目
大仏の鎮座黙禱黄砂降る
貧なるや富める者にも黄砂降る

風信子

熊倉千重子

春雨や畑に土に色戻る
稽古へと蛇の目の舞妓春の雨
水足せば根が生き生きとヒヤシンス
さくら草野外ステージ出来上がる
汐干狩潮の香満つるバスの中

卒業

野平美紗子

卒業式母参列の日の遠し
旋回は別れのことば鳥帰る
学舎より異国語こぼれ桃の花
土手駆くる若人春の服揺らし
初桜外つ国の子に出すメール

水 温 む 田 中 章 嘉

水温む腕捲りして洗車かな
洗ひ物袖が邪魔する頃となり
土弄り畠の中に土器らしき
そつと出て人驚かす園の蛇
早ばやと目高産卵気忙しき

三月の風 下 川 光 子

きまぐれな三月の風やり過す
三月のミモザサラダを一緒に
主まだ戻らず庭の梅見頃
梅の宿おすべらかしとすれ違ふ
眠たげな縮緬雛灯を落す

白 木 蓮 上 戸 千 津 子

大木や頭上で香る白木蓮
吾も雛も昭和一桁忘れ水
鶯や路地は端か三下り
壺焼の荒磯の香を噴き上ぐる
鶯の調子極り声千金

春 宮 崎 紫 水

登校の列に乗りけり春の風
塗り立ての校舎にばかり春の雲
理科室は実験終了春の雷
朗読の詩をしつとりと春の雨
朝練や昇降口に春の泥

潮 の 香 松 山 清 子

木蓮やこの古民家も自動ドア
ペランダの草履の行方春一番
長閑なり手摺の多き家に住み
えんぴつを削り苦吟の日永かな
紀州路や潮の香にのり梅の香も

ク ロ ッ カ ス 後 藤 綾 子

みどり児の笑顔に似たりクロッカス
町角のピオラにゆるるクロッカス
星隴 ゆつくり動く宇宙船
山笑ふリユックが並ぶ無人駅
雪解川巖をけずる音をたて

『水明誌』を繙く（水明三月号）

大石雄鬼（陸）編集長

水ぐすりとろりと舌に松の内（二三頁） 西山貴美子

私には「水ぐすり」という言い方になじみがない。「シロップ」の方がなじみがある。こどものころは、薬と言えば「シロップ」であった。だから「水ぐすり」という表現に、すこしどきりとする。私より上の世代はどうであろうか。ここを「シロップ」としてしまつたら、この句は死んでしまう。

その「水ぐすり」がとろりとした。そしてわざわざ「舌に」と、即物的にリアル感を醸し出している。どきりとする感覚をさらに増長している。ただ水ぐすりを飲んだだけにその様子をリアルに描写（見ることはできない口の中での感覚であるが）することです思議な印象を与えている。

そして季語「松の内」。それは、正月に体の具合が悪いということとを意味しているが、正月でも「松の内」という季語を選択したこととで、この句を面白くした。言葉の並びから「舌」に「松の内」があるように錯覚してしまう。そのようなことは言っていないし、舌に「で切つて解釈する」ので、「松の内」をその時期と解釈するのが普通である。そうとはわかつているが、なぜか「舌」に松が立っている、門松が立っている荒唐無稽な光景がちらつくのだ。

作者本人は、直感的に「松の内」という語を選んでいることは、実作者としても分かるが、それに惹かれる私の心を覗いてみると、舌に立っている松の姿が見えるのである。

うすらひや戦後のあそび連れてくる（二二頁） 霜中冬至

俳句の醍醐味はその分かりにくさ。何かは伝わってくるのだが、その意味、光景が明確になっていない俳句、それも魅力である。舌足らずの余韻と言つてもよいかもしれない。

「戦後のあそび」とは何か。特にわからないのが「連れてくる」である。「連れてくる」には、手を引いて連れてくるイメージがあるが、「戦後のあそび連れてくる」とはどういうことであろうか。「遊び」を「あそび」とひらがなで表現したことで、遊びよりも広い範囲（あくまで私の主観であるが）を感じる。めんこやペーゴマ、おはじき、綾取り、けん玉、かくれんぼ、鬼ごっこ、缶蹴りなど私のこともの頃の遊びから、遊びとして定まっているあそびまでを含んでいる。特に終戦直後の、こどもたちが貧しい中でも工夫したあそび（具体的には分らないのだが）を想像する。

それらが、薄氷に映るようになって、連れてこられた。作者の記憶、思い出にある「戦後のあそび」が、当時も見ていたであろう薄氷をきっかけとして、頭の中の記憶が頭の中に戦後のあそびを連れてきた。

これが私のこの句に対する印象である。正解は分からない。いや、正解がないのが俳句であろう。作者の意図したことが正解ではないし、誰かの解釈が正解でもない。そんな、自由な俳句が私は好きである。

現代俳句鑑賞

網野月を

明日流す形代雛の引き目かな

寺井谷子

(『俳句四季』3月号・巻頭句より)

上五の「明日流す」に情感が溜め込まれている。前の日の宵に用意した「形代雛」には、簡素な衣装が着せられて、引き目が施されている。いわゆる「引き目鉤鼻」のそれである。大和絵の類型的な描写技法であるが、様式美に昇華された表現方法だ。前日の作者の雛に込める願いと愛おしさが切れの無い一句仕立てと座五の切れ字「・・かな」に集約されている。

北岳の雲千切る風寒がはり

湯口昌彦

(『俳句四季』3月号・北岳より)

「北岳」というのは日本で二番目に高い山で、南アルプスの赤石山脈の一峰である。南方へ連なる二つの岳とともに白根さんとも呼ばれている。南から望むと「北岳」であり、北から望むと三峰の北面に残雪が認められて、「白根山」ということになるのである。岳に架かる雲の「千切」れる様子から季感を読み取っているのである。

風空の青へ突きあげ花アロエ

本井 英

(『俳壇』3月号・青へ突きあげより)

「風空」は作者の造語であろうか？海が風ぐように空も風ぐように静かであるという意に解した。そして座五の「花アロエ」であるが、確かに「アロエ」も他の植物の大多数と同様に引力に逆らうように空へ向いて花をつける。横合いから伸びた花茎も巧みに曲がって空へ向かってゆく。句中のアイテムの主従が見事に景を作り出している。ところで「風空」「花アロエ」は季語であろうか？他に「鐘低う吊りある紅葉明りかな」がある。

犬ふぐり少年肩をぶつけ合ふ

西山ゆりこ

(『俳壇』3月号・バックネットより)

何かを見つげるためにしゃがみ込んだ少年たちが「肩をぶつけ合」っているのだ。上五の季語「犬ふぐり」がどうしても下草であるから連想が足元に向かうのであるが、もしかしたらサッカーをしているのかも知れない。そして其処には「犬ふぐり」が咲いている。「少年」と響き合っている構成で

ある。どちらにしても季語は上五の呈示であるので、景の状況設定と考えたい。

春宵の舳ひを解く月の船

鈴鹿 呂仁

〔俳句界〕3月号・新作巻頭より

月光の下の船である。漁にでも出船するのであろうか？「舳ひ」であるので、何艘かが横繋ぎになっていたのであろう。切れの無い一句仕立てが舳船の連携をも表して、加えて、その分座五まで「春宵」が行き届いている。

年つまる早煮昆布の泡いくつ

秋尾 敏

〔俳句界〕3月号・節料理より

中七の「早煮昆布」の効果が抜群である。存在感が大である。そしてその昆布に付く泡や鍋に付いている泡の景が微妙なニュアンスを醸し出している。景と登場するアイテムの選択が秀抜なのである。上五の季語「年つまる」が年用意の慌ただしさとともに毎年の事事ができる日常の幸福感も表現している。

余命とやわが身の内に花吹雪く

福田 葉子

〔俳句〕3月号・カルナバルより

すべての人類において通用するものとして、余命なのである。ベテランの作者が言えば尚更に、含蓄に富んだ響きがあり、深みが増すのである。加えて、「身の内に花吹雪く」の

であるから、ダメ押しと言っても良いであろう。年を取ることにへの挑戦状であるが、他に「マスクして心秘すれば老いにける」があり掲句と対をなしている。

ふらごっこに縋る天網裂けたれば

齋藤 慎爾

〔俳句〕3月号・斧と鉞より

この「ふらごっこ」はサーカスのそれではないかと筆者は想像した。とすると安全ネットであるとともに、「天網」は比喩的表現として解釈することになるかも知れない。もしかすると「縋る」と「天網」の間に切れを感じて解することも出来る。この場合は、「ふらごっこ」を吊る支点が抽象的な意味合いを帯びることになる。「天網」が裂けたので「縋る」ということであるが、他に「己が末路おほよそ見ゆる眞葛原」がある。

冬眠の山にしつかりしがみつく

大石 雄鬼

〔句誌「陸」〕3月号・しがみつくより

「しがみつく」の主語は何であろう。山に植えられた針葉樹か？元々自生していた落葉広葉樹なのかもしれない。樹木ならば根が張って、山に「しがみつ」いている景となる。または、人家が斜面に「しがみつ」いている景も想像できるであろう。他に「水底はひよごごとし水温む」がある。中七の直喩表現「……ごとし」において、「ひよこ」は象徴（シンボル）として扱われている。

令和三年

水
明
賞

野田静香
日高道を
青木鶴城

令和二年

季
音
賞

梅澤佐江
松井由紀子
井口俊晴

山本鬼之介

選考経過

◆水明賞◆

令和三年の水明賞は、令和三年三月二日の水明賞選考委員会において選考し決定した。選考委員会では、令和二年の水明集巻頭を取った十名の作家を候補者として選び、各月の作品の出来栄えや順位、更に、十月号での夏季競詠の順位も審査の対象として、各候補者について全委員が十二分に意見を述べ討議を重ねた結果、上記の三名に授賞することを決定した。今年七月号より季音「花」欄の作家として更に精進され、無鑑査同人として自己の個性をなお一層発揮した優秀な作品を発表されることを大いに期待している。

◆季音賞◆

令和三年の季音賞は、令和三年三月二日の季音賞選考委員会において選考し決定した。選考委員会では、前年の季音「花」欄で優秀な作品を発表した上位の作家を候補者として選び、候補者について委員から充分に意見を述べ合い討議を重ねた結果、上記の三名に授賞することを決定した。今年七月号より、季音「月」欄の作家として更に作品に磨きをかけてと共に、後輩の指導にも心配りをしてもらうことを望んでいる。

令和三年

かな女賞

な
し

令和三年

新珠賞

仲田利子
本橋稀香
新暦文

山本鬼之介

選考経過

◆かな女賞◆

令和三年のかな女賞について、主宰として考慮を重ねたが該当者が浮かばず、「該当者無し」にする意向を網野月を幹事長と大村節代編集長に伝えて同意を得、その旨を四月六日の常任運営幹事会において報告した。

◆新珠賞◆

- 令和三年の新珠賞は、令和三年三月二十一日の新珠賞選考委員会において、推選委員四名の選考結果を踏まえて選考し決定した。選考過程は左記の通り。
- ①予選通過作品22編の作者名を隠し作品№で選考した。
 - ②各委員が、最少3編、最多8編の推選作品を挙げた。
 - ③15作品が選考の対象となり、まず一次選考で得票数によって9作品が選ばれた。
 - ④各委員が9作品について講評し、推す理由と推さない理由を述べ合い、審議することを確認した。
 - ⑤テーマ詠、季重なり、誤字脱字、15句の季の並べ方など基本事項について確認し合った。
 - ⑥二次選考の結果5作品に絞られ、再度審議を深めた。
 - ⑦一位に3点、二位に2点、三位に1点を付けて5作品の最終投票を行った。
 - ⑧以上によって、上記三名に新珠賞を授賞、篠崎紀子と諏訪サヨ子の作品を佳作とした。

水明賞 野田静香



〔略歴〕昭和二十四年山形県生。平成二十六年八月水明入会三十年同人。令和元年新珠賞。たかな俳句会、皐月の会、円卓の会、現代俳句協会会員。

受賞のことば

この度の水明賞受賞にあたり、山本鬼之介主宰、選考委員の皆様にご心より御礼を申し上げます。

水明賞はまだまだ先の話と思っておりましたので、大変驚きました。鬼之介主宰に「勢いが大事」と言うお言葉を頂き、はっとさせられました。俳句の奥深さの入口に立ち、追求していくことが、今後の課題となりそうです。勢いという力を借りて精進を重ねて参ります。今後共、お導きをお願い致します。

最後に、諸先輩の皆様のご指導を宜しくお願い申し上げます。

誠に有難うございました。

▼受賞対象句抄

秋の川面影橋の暮れ残る
帰り花米寿の叔母のハイヒール
日脚伸び舟の影曳く佃島
下萌や我に囁く応援歌
朧なる稜線後に発車ベル
百年の校舎を隠す桜かな
蒼天を飛ぶ夢果てぬつばめ魚
黒南風やデモ行進の蛇行せり
美容室の鏡の中の七変化
秋の川友禪染に生宿る

水明賞 日高道を



受賞のことば

この度は、令和三年度の水明賞の受賞、心より御礼申し上げます。

そのお知らせは、三月二日の春の嵐の夜に突然飛び込んでまいりました。勿論私にとっては全くの予想だにしないこと、折角お知らせくださった主宰に対し、私はまだ賞を頂くレベルではありませんと申し上げ、却ってお叱りを受けました。翌朝には、頭を切り替え、折角選んでいただいた選考委員の方々の為にも、今後より一層精進をして俳句の道を進んでゆくことを決意したところです。

新型コロナウイルスのまん延で日常生活に様々な制約を受ける中で、俳句は何か工夫により継続可能な文化活動です。

今後より良き「詠み手」として、また「読み手」として、皆様と一緒に俳句を楽しみたいと思います。

主宰をはじめ選考委員の皆様、水明俳句会の諸先輩や句友の皆様は心より感謝申し上げます。今後ともご指導ご鞭撻を賜りますようお願い申し上げます。

▼受賞対象句抄

目が覚めて夢の彼方へ宝船
ミサイルの似合はぬ青よ初御空
春風に踊り出したる四分音符
松明に浮かぶ童女の白重
芽柳や銀座の母は今いづこ
夏の灯や島にひとつの診療所
蝸牛破産知らせる紙赤し
ライオンの声ぞ悲しき夜の秋
野の花の一つひとつにある音色
立冬やスカイツリーの影の街

水明賞 青木鶴城



〈略歴〉昭和二四年佐賀県生。

平成二九年水明入会。令和元年
同人。新珠賞。若松例会、第二
例会、新樹の会、たかな俳句
会、円卓の会、蛸蚪の会、繭の会、
若鮎句会。現代俳句協会会員。

受賞のことば

平成二九年に入会以来まだ四年の俳句経験での「水明賞」受賞に、正直なところ驚きを禁じ得ません。

ひとえに山本鬼之介主宰と網野月を先生のご指導の賜物と御礼申し上げます。また、一緒に研鑽を積ませて頂いた各句会の皆様には心より感謝申し上げます。

何事においても好不調の波は付き物。どうしても句が出来ない時、句友の励ましやアドバイスが俳句を継続させ研鑽へと繋がった気がします。

俳句は奥の深いもの。更なる高みを目指し精進を続ける事こそ受賞者の義務だと心得ます。微力ながら水明の更なる発展の為に常任幹事や普及促進担当としてのサポートが出来ればと思っております。

今後とも皆様の更なるご指導ご鞭撻をお願い申し上げます。

▼受賞対象句抄

初霜や心の解けていくやうな
鍛練の一打の冴えや福寿草
鶯や運び留むる筆の先
丸めたる紙の匂ひや光悦忌
行く春の太極拳のテンポかな
仰がるる殿様となれ蛙の子
捺染の老舗の暖簾閑古鳥
さやけしや打首めいて躰り口
長き夜や三角形の二辺の和
友の有り囲炉裏の酒に夜を混ぜて

季音賞

梅澤佐江



〔略歴〕昭和二十一年茨城県生。
平成十七年水明入会。平成十九
年同人。平成二十三年新珠賞。
令和元年水明賞。第五例会、若
松例会、俳句の手ほどき、雛の
会、ひまわり句会。

受賞のことば

三月二日の宵、主宰より「季音賞受賞」のお電話を頂きました。望外の喜びと共に身に余る光栄に身の引き締まる思いで一杯です。

永年ご指導を賜りました鬼之介主宰をはじめ、諸先生、諸先輩、句友の皆様深く感謝申し上げます。

俳句は感性の文学と言われますが、他の方の俳句を読むとき、一句の中できらりと光る一語に出会う事があります。この一語が辞書的意味を超えて広がり、輝きとなり一句を支えており、日本語の奥深さ、美しさを感じ入るときでもあります。今、この自分の思いを現すのはこれだと言うこととは、其れを求めべく精進し、心の奥底から発した一行詩となるよう努めて参りますので、これからもどうぞ宜しくお願い申し上げます。

最後になりましたが、選考委員の皆様には心より御礼申し上げます。

ありがとうございました。

▼受賞対象句抄

若水をふふみて五感研ぎ澄ます
待ち合はす春の時雨の二月堂
人魚のやうに座る乙女よ磯遊び
春装は貝紫の恋ごろも
純白に翳りの見ゆる薔薇の午後
まくなぎの道に入り日のやはらかし
恋唄を指の先まで風の盆
瓢の笛愛しき日々の甦る
銀座晩秋昔の味の餡蜜屋
近松忌師の菩提寺に比翼塚

季音賞

松井由紀子



〔略歴〕昭和五年静岡県生。平成二十四年水明入会。平成二十七年新珠賞受賞・同人。令和元年季音同人。第一例会、第四例会、桜蔭句会、現代俳句協会会員。

受賞のことば

三月宵節句の夜に主宰より「季音賞」受賞のお電話を頂きました。驚きのあと暫く呆然そして嬉しさが込みあげて来ました。

九年前、面白そうと気軽に始めた俳句でしたが入ってみるとそんな安易な気分は忽ち吹き飛び奥深い句作の迷路をその後長く右往左往することに。そして今荣誉ある賞を頂けることは夢のようです。鬼之介主宰、選考委員の方々そして先輩の皆様日頃のご指導ご鞭撻を心より感謝申しあげます。また初心者私の私を長い間温かくご指導くださいました故光二前主宰、引退された山中順子先生まことに有難うございました。九十歳を越えた私これからは健康に気を付けて力まず怠けず句作を続けましょう。そして皆様と句会を楽しんで過ごせましたらこれ以上の喜びはありません。どうぞ宜しくお願い申し上げます。

▼受賞対象句抄

冬ぬくし診療室の招き猫
春寒し雲なき空の底光り
春雷のおつとりと来る村境
開ききつてもう戻れないチューリップ
心音を医師にあづくる夏はじめ
十葉や立ち返り来る失意の日
蜂の巣の日に日に太る閻魔堂
柚道は太古の匂ひ山清水
イントロを躓いてゐる秋の蟬
妻が妻らしくなりゆく秋裕

季音賞 井口俊晴



〔略歴〕昭和二十一年神奈川
県生。平成二十三年水明入会。
二十六年新珠賞、同人。三十年
水明賞。若松例会、コクーンシ
ティカルチャー俳句教室、柿の
木塾。現代俳句協会会員。

受賞のことば

水明に入会したのは東日本大震災の直後、四月のことだ
つたから、あれから十年経ったことになる。始めのころは
「俳句小学校三年生です」とか「四年生です」などとおど
けていたが、流石にそうはいかなくなつた。

ところがである。句作りで迷うのは、最初のころと少し
も変わらない。確かに知っている言葉の数は増えた。恥ず
かしながら「蝌蚪」とか「半夏生」などは、俳句を始めて
から覚えた。それまで六十何年かの人生では、全く知らず
に過ごしてきたわけだ。また、知らないでもすんだのだ。

そうして十年、家内と犬の散歩をしていても、俳句のこ
とがいつも頭をよぎる。ああ辛夷の花が咲き始めたな、お
や蟬が鳴きだしたぞ、四季の移ろいに敏感になつた。夫婦
の会話も豊かになつた。絶えず苦吟しているお陰だろうか。
非才ではあるが、さらなる十年をめざし励みたいと思う。
先生、句友の皆さま、どうぞよろしくお願い致します。

▼受賞対象句抄

黄落やジバングと化す峡の村
一月や海賊船は錨あげ
初稽古大上段に気合込め
ストックをいちにいちにと息白し
つばくらめ街に昭和が甦る
紺緋母が遣せし袷かな
遠泳や舟の太鼓に声そろへ
腹の中隠すことなき海月かな
鯛や永く痛みし奥歯抜く
胃袋をむんずと握む鷹の爪

新珠賞

仲田利子



〔略歴〕昭和十二年東京都生。
令和元年水明入会。令和二年同人。大宮読売俳句教室―現・りんどう俳句会。

受賞のことば

この度は新珠賞受賞有難うございました。この歳になってこのような賞に応募、受賞出来るなんて思いも寄らぬことでした。句会での主宰や句友の方より「皆さん新珠賞に是非応募して下さい」とのお言葉で「応募することに意義あり」と締切り間際応募しました。

主宰より「新珠賞出しましたよね。入りましたよ」とお電話を頂いた時は本当にびっくりしました。新参者の私なんかで良いのだろうか。不安を抱きつつも嬉しかったです。今までご指導頂いた山本鬼之介主宰、りんどう俳句会句友の皆様、また拙い私の句を選んで下さった諸先生方に心より御礼申し上げます。

私は若い頃から山やスキーが好きで休みは大抵山でした。百名山も七五座位は登っています。この度の応募句は最近の山旅までで心に残っていることを纏めたものです。

微力ながらこれからも研鑽に励む所存ですのでご指導のほどよろしく願います。

▼受賞対象句

山旅点描

稜線の一点赤き初日の出
春の雪山中に建つ津波の碑
春の海富士炙り出し夕陽果つ
海明けや北方領土いよよ遠し
薄氷を足裏で拾ひ筑波山
立山の山嶺黒き涅槃像
痩せ屋根を辿る足下の春雪崩
会津線車内はひとり初夏の風
山頂の神社へ宮司夏の下駄
恋ひ焦がる白き駒草風の屋根
山に生く松原村は秋盛り
山峡の棚田の底に秋入日
陵や幾星霜の秋の風
秋深むダム殉職の碑を映し
こけし描く翁の眼確か雪五尺

新珠賞

本橋稀香



〔略歴〕昭和二十七年東京都生。
令和二年水明入会。第一例会、
若鮎句会。

受賞のことば

鬼之介主宰より新珠賞受賞のお電話を頂きました際は、驚いてしまいお礼の言葉にも詰まってしまいました。六年前に公民館の俳句サークルに入会し楽しく俳句を作っていました。が、より深く俳句を勉強したいという思いが募り、昨年水明の門を叩きました。主宰のご指導を直接受けたい一心で第一例会を希望しましたが、すぐに第一例会は水明のベテランの方々の方々の会だと気がきました。皆様についていけるかと不安もありましたが、緊張感のある本格的な句会こそ私の望んでいた句会でしたので、初心者私を受け入れて頂き感謝しております。

若鮎句会では、月を先生と鶴城先生に基本的な質問でも丁寧の説明をして頂き、私の俳句の土台が固まる様な気がいたします。

主宰、選考委員の皆様、この度の受賞は励みとなります。ありがとうございます。

第一例会はじめ諸先輩方、句友の皆様、今後ともご指導の程宜しくお願いいたします。

▼受賞対象句

美ら海

めんそおれ宮古の空に虹架かる
空と海溶け合ふ砂糖黍の果て
この橋の沖へ道なす雲の峰
海面をぷくり潜るや水眼鏡
遠浅の子等の歓声熱帯魚
漂へば海月の心地潮満つる
ソーキそばチャンプル旨し浜日傘
海弾くバナナボートや急旋回
美ら海を心ゆくまで子等の夏
海夕焼真白き浜を紅に
島唄の流るる浜辺星月夜
やどかり逃ぐる米兵の上陸地
道沿ひの大きな家墓碑姑咲く
シーサーの怒る形相日の盛り
機窓より離れゆく海夏惜しむ

新珠賞 新 曆文



〔略歴〕昭和十六年埼玉県行田市生。平成二十七年水明入会、平成二十九年同人、皐月の会、第四例会、りそな俳句会。現代俳句協会会員。

受賞のことば

俳句初心者の方が皐月の会に入会させて頂き九六年、思いがけなく「新珠賞」を受賞させて頂き誠に有難うございました。最初にご指導して頂きました皐月の会の山本鬼之介主宰、その後入会した第四例会の椎野美代子先生、りそな俳句会の星野和葉先生のご指導に又、句友の皆様に、心より感謝し御礼申し上げます。

会社を起業して四十数年、会社を息子に譲り第一線を退いた時、何か老後の生き甲斐になる習い事を探していた時、ある友人の紹介で皐月の会に入会し俳句を始め、鬼之介主宰の熱心なご指導でなんとか俳句の楽しさを感じる事が出来ました。少しずつですが俳句の難しさ、そして奥深さがわかって来た様な気がします。夢は近い内に八十年生きた証に自分の句集を出したいと思っています。

今回の受賞を糧に尚一層精進して参りますので皆様のご指導、ご鞭撻をお願い致します。

▼受賞対象句

紙の雪

初芝居髪に名残の紙の雪
初茜ことしの運を願ひたし
早春の寺に庭師や二三
人暖簾めく芽柳くぐり潮来舟
ことごとく唯我独尊つくしんぼ
昼の月そのかたはらに揚雲雀
さくら貝置く手のひらの未来よむ
半夏雨職を辞したる夫の黙
百選の水の郷なる心太
日盛や古閑裕而の応援歌
裸足にて燥ぐ親と子梓川
髭面の時止めて佇つ野紺菊
秋の蚊を連れて帰りぬ酔心地
懐石の品書き秋の声を添へ
老庭師のネクタイ姿文化の日

新 珠 賞 (結果報告)

春の雪 白寿百寿 四方の華 身辺抄 日常素描 早咲の梅 四季の桜 野鳥 冬空 万緑	嶋田洋子 佐藤克之 秋谷信一 神田治江 杉浦理恵 木村るみ子 反町修 藤間友二 森田恒宝 佐々木史女 工藤信子	初の付く新年の季語 (到着順)	北の大地 散る桜 佳作 詠訪サヨ子 篠崎紀子	紙の雪 新暦文 本の橋稀香 仲田利子	○受賞作品 山旅点描 仲田利子
--	---	--------------------	------------------------------------	-----------------------------	-----------------------

新 季 音 同 人 (昇欄者)

○新季音「花」欄 野田静香 青木鶴城 葛城千代子 佐々木典子	○新季音「月」欄 梅澤佐江 井口俊晴 西浦千枝子 松山清子	○新季音「雪」欄 小倉倭子 柚木治子	夏そして秋へ 夏遍路・土佐 明日をみる 利休忌の頃 記憶 45 冬青空
日高道恵 石川理恵 川島典虎 瀬戸雄二郎	松井由紀子 上戸千津子 野口和子	十倉和子	山岸久美子 山中いちい 岡田宣子 綿貫ひさの 小駒さち子 川島典虎

新珠賞への息吹再び

委員長 山本鬼之介

水明創刊百年に向けてスタートした今年、ここ数年に亘り低迷していた新珠賞の応募者数が増え、予選通過作品二十二編について選考する運びとなったことは、まことに喜ばしいことです。更に、応募者は新珠賞の目的に相応しい俳句歴の浅い新人が殆どで、また一方で、句歴の長い高齢の初挑戦者も数名おられるなど、これまでとは違った特徴のある応募者層でありました。

昨年から新人の多い句会を中心に、新珠賞への応募を積極的に呼びかけてきたことが効を奏したと思われしますので、今後もうこうした地道な努力を、句会の指導者・幹事・先輩諸氏に続けていただくことをお願いいたします。

さて、今年の結果は既報の通りですが、選考委員長として、今後の新人応募者の方々にぜひ守っていただきたいことをお伝えしますので、確りと心に留めてください。

- ①文字は一字一字心を込めて丁寧を書く。|| 癖字に注意。
- ②誤字・脱字を皆無にする。|| 辞書で充分確認。
- ③送り仮名や旧仮名遣いを正しく表記する。|| 辞書で確認。
- ④作品と同様に題名が大事。|| 熟考して付けること。

仲田利子「山旅点描」

春の雪山中に建つ津波の碑

薄水を足裏で拾ひ筑波山

会津線車内はひとり初夏の風

山峡の棚田の底に秋入日

こけし描く翁の眼確か雪五尺

作者が、趣味の一つとして登った山々をテーマにした作品と思われるが、タイトルが示すように、一つの山ではなく、複数の山を取り上げたことで、くどくなく爽やかな読後感を読者に与えたことが成功の鍵になったと思う。題名が佳い。

本橋稀香「美ら海」

めんそおれ宮古の空に虹架かる

この橋の沖へ道なす雲の峰

漂へば海月の心地潮満つる

美ら海を心ゆくまで子等の夏

機窓より離れゆく海夏惜しむ

夏の沖繩を題材にした連作形式の作品で、題名の「美ら海」の魅力に惹かれた委員が多かったように感じた。沖繩各所の風景や風俗を上手く取り入れ、全体として雰囲気の良い作品にまとめたと思う。敢えて不満を言えば、一句一句の独立性が弱いことなどであるが、新人賞であるから、あまり多くを望むことは控えたい。力のある作家なので、受賞を機にさらに一段高みに登ってくれと期待している。

新 曆文 紙の雪

初芝居髪に名残の紙の雪

暖簾めく芽柳くぐり潮来舟

昼の月そのかたはらに揚雲雀

百選の水の郷なる心太

老庭師のネクタイ姿文化の日

十五句それぞれから牧歌的な雰囲気伝わってきて快い。

作者の実体験や暮しの中の断片、作者の心の中の別人格の行動など、一句一句の成立ちを想像すると楽しくなる。気負わず飾らぬ無欲の心根が委員の胸に響いたのだと思う。さらに精進されて曆文俳句に磨きを掛けてもらいたい。

篠崎紀子 散る桜

花火師は夜空の画布をふくらます

やはらかき視線に出合ふ良夜かな

地吹雪や生くるシナリオ紡ぐごと

なかなか佳いセンスを持っているが、十五句のばらつきや難解句などの問題点が指摘され、受賞には至らなかつた。今回の結果を反省材料にして、来年ぜひ再挑戦してほしい。

諏訪サヨ子 北の大地

春北風やポプラ並木の旧校舎

嫁入りの母彷彿と馬櫓かな

睨みたる千両役者蝦夷梟

北海道をテーマにした作品で、映画を思わせるタイトル名が佳い。一句一句の独立性は感じられるものの、全体のまとまり感が乏しい。もう少し焦点を絞り込んで詠んだ方が良かったのではなからうか。来年を期待している。

◆来年もぜひ応募していただきたい方々の句を紹介。

初日さす隠れ里から鳥望む

郭公の鈴に明くる露天風呂

秋雲の去り行く果てに手を翳し

鴉替はる湖底に恋の橋埋もる

黒黒と鯉の分けゆく花筏

山山へ薄桃色の冬夕焼

地を揺らす祭太鼓に血が騒ぐ

握り合ふ手に偽りの無き五月

草餅や秩父路飾る山ガール

紅葉狩踏み分け行くやけもの道

組板をはみ出すほどの初鯉

葉がくれに天道虫のいとほしや

仏桑花この先六里水場なし

山間の一集落の稲架の道

春夕焼見慣れし露地の別世界

手を繋ぐ太平洋の初日の出

吾が俳句付けて飾りし雛かな

工藤信子

佐々木史女

森田恒宝

藤間友二

反町 修

木村るみ子

杉浦理恵

神田治江

秋谷信一

佐藤克之

嶋田洋子

山岸久美子

山中いちい

岡田宣子

綿貫ひさの

小駒さち子

川島典虎

おめでとう

大村節代

新珠賞の予選通過は二十二作品という近来にない多さに、選考はもめるだろうと覚悟して臨む。案の定、選考会は喧嘩諍となり長時間に及んだ。しかし、推薦委員の意見も加味して、次の三名に全員一致で決定となった。おめでとう。

○仲田 利子「山旅点描」

稜線の一点赤き初日の出

薄氷を足裏で拾ひ筑波山

立山の山嶺黒き涅槃像

恋ひ焦がる白き駒草風の尾根

山峡の棚田の底に秋入日

作者を存じ上げないが、山が好きで、あちこちの山を踏破されたのであろうか。とかく地名の入った句は、地名に頼りすぎる嫌いがあるが、「山旅点描」は臨場感と山の息吹が程よく伝わり、それが選考の高評価に繋がった。

○本橋 稀香「美ら海」

空と海溶け合ふ砂糖黍の果て

島唄の流るる浜辺星月夜

やどかり逃ぐる米兵の上陸地

道沿ひの大きな墓梯姑咲く

機窓より離れゆく海夏惜しむ

沖繩への旅行吟であろう。感動と楽しさが句に満ちている。散漫な表現もあるが、それに勝る沖繩への思いがあふれ楽しさに満ちた句の数々。砂糖黍、島唄、梯姑等々これぞ沖繩と言った句材に助けられ沖繩へ読み手まで誘ってくれる。

○新 暦文「紙の雪」

初芝居髪に名残の紙の雪

ことごとく唯我独尊つくしんぼ

さくら貝置く手のひらの未来よむ

懐石の品書き秋の声を添へ

老庭師のネクタイ姿文化の日

今年の新珠賞の三作のうち、前二作はテーマを決めて十五句を詠んでいる。しかしこの作者は一句毎にふとした感動をさりげなく表現する。初芝居は髪紙吹雪を、つくしんぼは何と唯我独尊とは、目のつけ所の意外な感性に脱帽した。

○その他の心に響いた作品

シュミーズで飛び込む夏の川ありぬ

諏訪サヨ子

枯葉舞ふライブに酔うて帰る道

小駒さち子

俳句を始めて日の浅い作者も多々応募されたようである。喜ばしい。それ故、季語と分り難い季語もあるので、季重なりは仕方ない場合もある。しかし如何なる場合も誤字には気をつけたい。今回も誤字故に受賞を逃した作品があった。誤字に気をつけて来年もより多くの方の挑戦を待っています。

珠を磨く

石山かつ子

今年はコロナの緊急事態宣言の中、応募してくださいだった二十二名の方々に感謝申し上げます。外出のままならぬこの時期に作品を纏めるのも大変な事だったと思う。これも作者それぞれの俳句に対する挑戦してみようという意欲の表れである。その中より新珠賞を受賞された三氏に心よりお祝の言葉を申し上げます。

「山旅点描」 仲田利子

稜線の一点赤き初日の出

人間が山へ行くのは、自然に返る本能であろう。心が休まるひとときである。初日を待つ静かな引き締った空気の中で、心が洗われるような一瞬である。

痩せ尾根を辿る足下の春雪崩

山頂の神社へ宮司夏の下駄

こけし描く翁の眼確か雪五尺

ていねいに山々を歩き、その体験をそれぞれ十五句に纏めている。尾根の方よりこぼした雪塊も春ともなれば、まろげまろげ雪崩になってしまふ事もある。山頂へ行く宮司の夏下駄。過去の事を現在に持って来て句に成してしるところがお手柄である。

「美ら海」 本橋稀香

空と海溶け合ふ砂糖黍の果て

この橋の沖へ道なす雲の峰

機窓より離れゆく海夏惜しむ

沖繩の広い空と青い海を満喫なさっている作品。この十五句を見ていると、今すぐにも行きたいような衝動にかきたえられる。いきおいのあるお句と拝見した。まだまだ荒削りながらこれからの成長が楽しみである。

「紙の雪」 新 曆文

初芝居髪に名残の紙の雪

暖簾めく芽柳くぐり潮来舟

老庭師のネクタイ姿文化の日

昨年より一段と進歩なさった様子が句に表れている。十五句共に順序よく整っていてつきつきと読ませてくれる。最後に老庭師のふだん見られない職人のネクタイ姿に物語性を感じた。

今回受賞を逃したもののこれから期待したい作品

早咲きの桜見とれる喉仏

篠崎 紀子

わらわらと老いも若きも蕨狩

諏訪サヨ子

和音なる般若心経百日紅

山中いちい

横顔に母の面影遠花火

嶋田 洋子

スタートライン 石井喜恵

コロナ禍未だ収束の見えぬ中、例年にも増して多くの応募作品があった事は特記に値する。受賞された仲田利子、本橋稀香、新暦文の三氏には惜しみ無い拍手をお送りする。

仲田利子 「山旅点描」

春の海富士炙り出し夕陽果つ

薄氷を足裏で拾ひ筑波山

山峡の棚田の底に秋入日

陵や幾星霜の秋の風

「山旅点描」この題名に詩情を感じた。そしてどの句にも確かな写生の目が効いている。富士炙り出しの夕陽、ただの夕陽ではない炙り出したと強調した事で、景がより鮮明になった。足裏で拾ふ薄氷、踏む薄氷ではない。心情に迫る言葉の幹旋が素晴らしい。更に棚田の底の入日、天皇の御陵に思いを馳せ詠んだ秋の風、作者の詩心に魅力を感じた。

本橋稀香 「美ら海」

この橋の沖へ道なす雲の峰

海面をぷくり潜るや水眼鏡

先ずは早い段階での応募作品一番乗りの熱意を買う。沖縄宮古島空港に降り立ってから帰路に就くまでの旅行吟である

が、その中での前句、沖へ道なす雲の峰、と大景を詠んで独立性のある一句として好感を持った。後句「水眼鏡」なる珍しい季語を難なく使いこなしている点に注目した。

やどかり逃ぐる米兵の上陸地

機窓より離れゆく海夏惜しむ

旅の終りの一抹の寂しさを筆者も共に味わった。

新 暦文 「紙の雪」

初芝居髪に名残の紙の雪

懐石の品書き秋の声を添へ

全体を通して心象を表に出さない分、いささか平明な句作りを感じた。ただ一句、一句独立した景を素直に詠む事が作者の個性なのかも知れない。その中で題名にもなった、髪に名残の紙の雪、は心象が投影された佳句である。

秋の蚊を連れて帰りぬ酔心地

老庭師のネクタイ姿文化の日

この二句は、俳諧味の効いた楽しい句である。

今回、受賞には到らなかったものの印象に残った作品を挙げさせて頂く。

黒黒と鯉の分けゆく花筏

反町 修

映像が鮮明に浮かぶ。更に黒とうす紅色の色彩も見える。

願ひは一つ吾が逝く時は冬青空

川島典虎

願ひは一つ、筆者も同感。そう願う人は多い筈である。

豊穰の年

井口俊晴

今年は応募総数二十二作品、近来にない豊穰の年でした。その中から見事に受賞の栄に輝かれた仲田利子、本橋稀香、新曆文の三氏にお祝いを申し上げます。

新珠賞は水明俳句会の登竜門だと言われます。では、受賞に必要なことは何でしょうか。若々しさと、それを支える気合、熱気のようなものだと私は考えます。受賞された三作品はもちろん、その他の作品も気合十分だったと思います。

まず、仲田利子さんの「山旅点描」から
稜線の一点赤き初日の出

春の雪山中に建つ津波の碑

春の海富士炙り出し夕陽果つ

冒頭からの三句。太陽が今この瞬間に真っ赤な点となって昇って来る爽やかな緊張感、続いて東日本大震災による津波の碑に接した哀しみ、そして東海の花に沈む夕陽と富士山、ロマンあふれる構成です。

続いて本橋稀香さんの「美ら海」。沖繩の美しい海を詠んでいます。沖繩の旅が新珠賞のテーマになったのは初めてではないでしょうか。

めんそおれ宮古の空に虹架かる
やどかり逃ぐる米兵の上陸地

機窓より離れゆく海夏惜しむ

私は沖繩に行ったことがありませんが、旅がただの「美ら海」観光に終わらなかつたと感じました。やどかりが逃げて行ったのは、沖繩戦でアメリカ軍が上陸し、十万人を超す沖繩の人々が犠牲となる、あの浜辺だったからです。

新曆文さんの「紙の雪」は前の二編とはちよつと趣が異なるものの、やはり気合十分な作品です。

初芝居髪に名残の紙の雪

昼の月そのかたはらに揚雲雀

日盛や古関裕而の応援歌

NHKの連続テレビ小説「エール」の主人公・古関裕而は、甲子園の大会歌「栄冠は君に輝く」をはじめ、多くの応援歌を作曲しましたが、新さんの「応援歌」は、いくつになつても若々しさを忘れないご自身の生き様を象徴しています。

残念ながら受賞に至らなかつたものの、応募作には秀句や楽しい句が数々ありました。例えば嶋田洋子さんの「組板をはみ出すほどの初鰹」は、料理直前まで跳ね回る大きな鰹を詠んで、見事と言うほかりません。また、工藤信子さんの「初詣リボンを付けたボチと行く」は、大好きの私には微笑ましい限り。みなさん、来年はぜひ金的を射止めて下さい。

最後に苦言をちよつとだけ。それは、かなりの作品に誤字があつたこと。せつかくの句が、字の誤りで台無しになつてしまします。辞書で確かめる習慣をつけましょう。

歲月不待

保坂翔太

水明の「登竜門」である新珠賞に二十二名の方が挑戦され、仲田利子、本橋稀香、新曆文の三氏が見事に受賞された。コロナ禍の中、切磋琢磨され賞を射止められたことに心よりお祝い申し上げます。

◇山旅点描

仲田利子

稜線の一点赤き初日の出

春の海富士炙り出し夕陽果つ

会津線車内はひとり初夏の風

山頂の神社へ宮司夏の下駄

山峡の棚田の底に秋入日

旅の視点で詠まれた「山旅点描」は、難しい表現をせず、情感を素直に詠んで十五句を束ねている。「山峡の」の句に象徴されるようにすばらしい観察眼をもっている。今後が楽しみである。

◇美ら海

本橋稀香

めんそおれ宮古の空に虹架かる

空と海溶け合ふ砂糖黍の果て

漂へば海月の心地潮満つる

やどかり逃ぐる米兵の上陸地

機窓より離れゆく海夏惜しむ

飛行機で宮古島を訪れたその時の初句「めんそおれ」から、終句の宮古島を離陸する「機窓より」まで、ストーリー性が

豊かであり、「美ら海」の情景を、物語を読むように一気に読んだ。一段の飛躍を期待する。

◇紙の雪

新曆文

初芝居髪に名残の紙の雪

暖簾めく芽柳くぐり潮来舟

百選の水の郷なる心太

老庭師のネクタイ姿文化の日

題名「紙の雪」は一句のフレーズから付けられており、それぞれの句は、題名とは直接関連はないのであるが、己の感動を読者に伝えることはできている。さらなる研鑽を。

残念ながら今一步で受賞を逃した佳作の作家を取り上げる。

花遍路一期一会の鈴が鳴る

篠崎紀子

嫁入りの母彷彿と馬櫓かな

諏訪サヨ子

花遍路の句は「鈴が鳴る」の下五による余情がよい。嫁入りの句は「馬櫓かな」の表現が感動的である。篠崎紀子氏とともに諏訪サヨ子氏の来年度に期待する。

佳作の作家以外に将来を嘱望される作家の句を取り上げる。

新蕎麦の旗が呼び込む門前町

佐々木史女

中七の「旗が呼び込む」の表現がよい。

天高く鬼ごつこの子ら声はつむ

山岸久美子

情景がよく分かる句であるが、さらに推敲を重ねることによって佳句となる。

歲月不待は、「時に及んでまさに勉励すべし（及時当勉励）、歲月人を待たず（歲月不待人）」という陶淵明の漢詩の一節から引用した。今の時を大事に思い、俳句の五七五に魅せられて勉勵する新しい風は、水明発展の源である。

光る玉 青木鶴城

先ず今年度の新珠賞を受賞された仲田利子、新暦文、本橋
稀香の三氏にお祝いを申し上げたい。

審査の対象となった二十二作品は、其々工夫を凝らして練
り上げられたものであった。しかしながら、誤字や乱雑に文
字訂正をした作品が有り、低評価に繋がる結果となったのは
残念であった。

「山旅点描」 仲田利子

春の雪山中に建つ津波の碑

薄氷を足裏で拾ひ筑波山

山峡の棚田の底に秋入日

山をテーマに作品十五句が纏められていてどの句も独立し
て句が生きている感覚を持った。山中に建つ津波の碑に被災
者の事を想い、筑波山では靴下を脱いで薄氷を肌で感じ、棚
田では入り日が棚田の底に沈んでゆくと感じる作者の感性を
素晴らしいと思う。今後のさらなる成長を期待したい。

「紙の雪」 新 暦文

初芝居髪に名残の紙の雪

老庭師のネクタイ姿文化の日

最初の句と締め句。中間の句には十五句を満たすために
加えた感じのものも有ったが、この二句が不足を補うだけの
余韻を残した。紙の雪の映像が良い。老庭師がネクタイ姿の

文化の日は一体どういう意味を持つ一日であったのか。

「美ら海」 本橋稀香

この橋の沖へ道なす雲の峰

漂へば海月の心地潮満つる

機窓より離れ行く海夏惜しむ

沖縄旅行を題材にした十五句であるが、宮古島に始まり帰
りの飛行機までの一貫した作品。ゆったりと大きな海の世界
観が全体に流れている。ただ、題名にもたれ過ぎた感が評価
に影響したのは残念であった。

惜しくも賞には至らなかったが、山中いちい氏の作品には
高い評価を付けたい。惜しまらくは土佐に頼らない方がよか
った。

夕べには行き倒れるもよし蝉時雨

八月やただひたすらの海岸線

蔵の宿青い蚊帳吊る影軽し

その他にも印象に残った句が数多く見られた。是非来年も
句歴の浅い句友からの更なる挑戦を期待したい。

展け行く春の碧天限りなし

葉桜や透けて星影数多なる

朝からの雨降りやまず冬灯

土筆よりはかまを取れば野の香り

早咲きの桜見とれる喉仏

夫の膝ねぎらふ間なし春の草

森田恒宝

反町 修

木村のみ子

杉浦理恵

篠崎紀子

神田治江

コロナにまけるな 日高道を

水明の登竜門である新珠賞の今年度の受賞者、仲田利子、本橋稀香、新暦文の三氏に心からのお祝いを申し上げます。

水明の他の結社賞と違い、新珠賞は応募作品の絶対評価で受賞が決定されますが、そのためにはまず応募しなくては始まりません。その点、今年度は一昨年や昨年の倍近い応募が寄せられました。応募された全員の皆さんの挑戦意欲に心からの敬意を表するとともに、今回残念ながら選に漏れた方々も、是非挑戦を継続して頂きたいと思えます。

「山旅点描」 仲田 利子

山歩きがご趣味なのでしょう。これまで訪ねられた各地の風景が生きて詠まれています。

「稜線の一点赤き初日の出」から始まり「こけし描く翁の眼確か雪五尺」まで、それぞれが独立した良句を揃える中で、山の四季をバランスよく配しています。

春の雪山中に建つ津波の碑

山峡の棚田の底に秋入日

秋深むダム殉職の碑を映し

これらの句は特に作者の自然に対する敬意、自然の脅威に対する敬虔さがにじみ出ています。

「美ら海」 本橋稀香

何事にも前向きに取り組まれる稀香さん、今賞にも十二月中旬に第一号で応募をされました。

内容は、沖縄旅行をされた時の情景を詠まれています。一句一句の季語に工夫の跡が見られ、それぞれの句としての獨立性を高める働きを持たせています。

また、「めんそおれ」で始まり、「機窓より離れゆく海夏惜しむ」で終わる十五句の構成にも起承転結があります。

空と海溶け合ふ砂糖黍の果て

この橋の沖へ道なす雲の峰

特に次の句に単なる旅行吟ではないメッセージを感じます。

やどかり逃ぐる米兵の上陸地

「紙の雪」 新 暦文

いつも自然の中での人間の営みを絶妙に詠まれる暦文さん。

今回も一句一句を上手に取り纏られています。

中でも表題になった最初の句

初芝居髪に名残の紙の雪

暦文さんらしい粋な世界を感じさせてくれます。

懐石の品書き秋の声を添へ

「秋の声を添へ」と詠まれた観察眼に感心させられます。

最後の句、

老庭師のネクタイ姿文化の日

表彰式での暦文さんのネクタイ姿、格好良い筈です。

その他の印象に残った句から

やはらかき視線に出会ふ良夜かな

寒月や深夜の保線鳴り響く

春の雁手話の教師の指の反り

是非来年も継続して挑戦していただきたいと思えます。

篠崎 紀子

岡田 宣子

藤間 友二

新珠賞秀句選

網野月を

万緑や大聖堂のドーム見ゆ

佐々木史女

東京カテドラルか、ウイーンのカールス教会か分らないのだが、「大聖堂」である。上五の季語「万緑」を通じて、その向こうにドームが垣間見えるということであろう。季語の効力を十分に活かしている。他に「万緑や古城にかかる雲切れて」の佳句である。

春の雁手話の教師の指の反り

藤間友二

秀句である。句意の境地も叙法も秀逸であろう。この態で十五句揃えてもらいたい。門出の季節に教え子を送り出す心境を上手に「春の雁」に委ねている。

翠巒や隠るるやうに余花の寺

反町 修

葉桜や透けて星数数多なる

良くできています。第一句の直喻表現はもしかしたら直接の表現でも可能であろう。そのところを探ってみて貰いたい。それにしても「余花の寺」の存在感が「隠るるやうに」とはいえ、絶大であって上五の「翠巒」に対して互角であるところに配合の妙味を見せている。第二句は座五の「数多なる」に甘

さがある。俳句はあくまでも汪洋とした表現を嫌って、具体性の表現の中に極めたいと考えている。

水溜まるハケの小径に黄の菖蒲

木村るみ子

新珠賞でここまでの境地の句も珍しいかも知れない。よく観察しているし、観察した事柄をよく叙している。惜しむらくは、座五を「菖蒲の黄」にしたいところである。

葉桜を揺らす風見る橋の上

杉浦理恵

潤む目の瞼温めし春陽かな

白鷺の飛翔の長き脚淋し

この作家は誤字が多かった。提出時にしっかりと確認して貰いたい。ではあるが、今回の応募作品の中では最も攻めていた作品を十五句揃えていたと思う。第一句は「：見る橋の上」が一枚の画を想像させて心地よい。第二句は季重なりではあるのだが、座五の「春陽」を本季語と解釈して、良句であると思う。第三句は「：長き脚淋し」の把握が優れている。例会で一緒にいる作家であるが、句会ではこのような落ち着いていて、しかも冒険している句は無かったようである。日頃からこのような句を多出して欲しいものである。

早咲きの桜見とれる喉仏

篠崎紀子

やはらかき視線に出会ふ良夜かな

第一句は見上げている景が、「喉仏」に集約されている。「早

咲き」だからこそ見上げるのである。桜樹に近似しているのである。第二句は「やはらかき視線」の將に柔らかない表現と漢字二字の固い表現とが、巧みに組み合わせられているところが良い。技巧句である。

シユミーズで飛び込む夏の川ありぬ 諏訪サヨ子
見本林綿虫の舞ふ綾子の碑

第一句はよく此処まで書いたなあ、という驚きがある。俳句はやはりリアリズムの方が表現的確性を創り出し、読み手の心へすんなりと入り込んでゆくことが分る。第二句は「綾子の碑」の解釈であろうか。選考委員の中には「綾子の碑」を嫌う向きもあったのだが、筆者は評価する。

ゆき合の風もさやぎて秋夕焼 山岸久美子

風の感触と嗅覚、座五の季語「秋夕焼」の視覚的状況の把握が巧みに絡み合って良句となった。中七「…て」を別の表現にしたいところである。

和音なる般若心経百日紅 山中いちい

座五の季語「百日紅」が安居を想像させた。むろんお題の「夏遍路」の景である。「心経」と取り合わせて叙景句の見本のよくな出来栄である。

寒月や深夜の保線鳴り響く 岡田宣子

質感のある句である。誓子句のようだ。シユールレアリスムも感じられるし、叙景の技法も的確であろう。むしろ力業で作り過ぎた感があるかも知れない。

バレンタインの日贈り続けて半世紀 小駒さち子

お幸せな景を想像した。贈り続けることは作者にとつて決して情性ではないのである。作者の人間性を想像させる句意で、つまり作者が句の中に存在しているのだ。筆者としては座五の「半世紀」を「五十二年」くらいに具体性のある数字を入れて、メモリアルな句にしたいと考える。

薄氷の靴跡踏めば金属音 川島典虎

願ひは一つ吾が逝く時は冬青空

第一句は、先に誰かの踏み跡が存在している薄氷へ作者が続いて踏み込んだ、と解した。水たまりか何かに張った薄氷はすでに割れているのだが、続いて踏みつけた作者にも、かすかに「金属音」をさせて応答してくれたのである。その喜びは作者を一瞬にして童心に立ち戻らせたのである。作り込んだ痕が無いだけに集中力で作り上げたのではないかと想像した。

第二句は、西行伝説に近い境地である。筆者のような小僧にはまだまだ書けない心意です。この願ひは必ず叶います。ただし、遠い未来のことですよ。

推薦委員寸評より

○大橋廸代

美ら海(正賞)

作品応募一番乗りの熱意と美しい句稿に拍手。全句そつな
く出来すぎの感がある。

○空と海溶け合ふ砂糖黍の果て

島唄の流るる浜辺星月夜

道沿ひの大きな家墓梯姑咲く

北の大地(準賞)

題名通り躍動感あふれる広大な景色とおいしい空気が伝わ
ってくる。

○わらわらと老いも若きも蔵狩

シユミーズで飛び込む夏の川ありぬ

嫁入りの母彷彿と馬櫓かな

○宇田白鷺

山旅点描(正賞)

山女の四季あふれる一句一句にあこがれました。目の前に
連峰が浮かんできます。

○椎野美代子

美ら海(正賞)

一句一句独立、完成しつつ、十五句に通底しているままと
りの良さ。読者をもその場に誘う臨場感。

山旅点描(正賞)

「美ら海」と同等の力量、題名に情感あり、それを生かして
いる。

○恋ひ焦がる白き駒草風の尾根

○茂木和子

美ら海(正賞)

沖繩旅行の一齣を丁寧に詠まれている。(旅行の始めから
去るまでを)が御報告的な感も否めない。しかし季語の斡旋
がとても上手であると思う。季語によつて句の内容がより大
きく、より深く感じられる。

季音欄の書き方

○二百字詰原稿用紙使用

○季音(雪・月・花)：欄外右上に朱書

○題名、名前は二行目

○俳句は四行目から上を開けずにお書き下さい。

※新・季音(花)欄の方は、七月号から花欄にな
ります。

編集部

俳誌望見 梅澤佐江

『玉梓』 令和三年一・二月号 通巻九一号

主宰 名村早智子 発行所 京都府京都市

平成一八年一月、名村早智子が京都で創刊。師系山口誓子・津田清子。「誰の心にも詩があること」を信じ、生活に深く根ざした詩を詠む」を信条とする。(隔月刊)

主宰詠「初御空」 一五句より

虫の夜の老舗料亭真闇がり

虫の音が聞こえてくる程の静かな秋の夜、老舗料亭には明かりも灯らず静まり返っている。昨春からの新型コロナウイルス感染症との戦いの為に此処の明かりも消えたのであろう。明かるく輝いている街の日常がどれ程幸せである事か身に沁みている作者である。

かまつかの色をくづさず枯れゆけり

枕草子にかまつかの名前で出てくる葉鶏頭の古名であるが、雁が来る頃に葉が紅色になることから雁来紅とも言い、晩秋には枯れる一年草であるが、中七の「色をくづさず」に人としての佇まいの有り様と重なる。

冷え冷えと日の射しあたる水路閣

秋ともなれば朝夕は冷え冷えとしてくるが、盆地の京都は尚更の事である。赤煉瓦と花崗岩で造られた無機質な水路閣に樹々の間から射し込む日の光も冷んやりとして思考力を呼び覚まし、静かな東山の風景の中で疎水の歴史に思いを馳せ

る一時でもある。

この冬は山へ返さう田一枚
山を開墾して代々受け継いで来られた田であろうか、其の田一枚を山へ返すと言う。次世代の離農、親世代の高齢化、過疎化への負の連鎖、耕作を放棄した土地は荒地と化し忽ち自然に還ってしまう。剩え食糧自給率の低い日本、深く考えさせられるお句である。

来し方も行方も遥か初御空

新年の初々しい心で見上げる空は清らかで荘厳、この清らかな空のもとは是迄の事やこれからの事等あれこれ考えるのは取るに足りないと思える。直向きに真っ直ぐに歩むのみと自身を鼓舞する。

全句を通じ、正に日常の中に非日常の詩を見つけて、独自の感性を大切にされて心豊かに日々を生きる背中を見た。

真朱集 主宰選 二三名 各七句より 三名
山ほどの宿題抱へ兜虫 房安栄子

柚子の木にゆずの顔して烏瓜 秋山具輝

長き夜や寄木小箱の謎を解く 古寺靖子

萌黄集 主宰選 一〇八名 各七句より 三名
落蟬の鳴き尽したる軽さかな 浅野一恵

柿を剥く二人に母はもうをらず 松木篤子

揺れてをり引くには高き烏瓜 安井和子

玉梓集 主宰選 一四一名 各五句より 三名
乱れ咲くてふも美しきや秋桜 坂梨喜久子

中傷の重荷は風化原爆忌 森下和子

小袋に入れ朝顔の種と書く 増田妙子

山本鬼之介 選

水明集

母見舞ひ嘘を残して春寒し
切り花の薄氷きらり朝の市
薄氷の音に惹かれて踏みしだく
春シヨール十歳若く見られたる
庭の色動き出したり露の臺

上尾 横山君夫

早春やただなんとなく銀座まで
スコッチの酔ひをひきずる春の風邪
白魚の掬へば踊る四手網
帆曳船風にまかすや白魚漁
朧月愛と言ふ字に酔ひにけり

さいたま 渋谷きいち

一瞬にハンドル攫ふ春一番
白魚の小鉢すがしき朝餉かな
涅槃西風夜の塔婆は話し出す
滑降す春一番を突き破り
目刺焼く煙の中に海の色

さいたま 西幅公子

山神の笑窪愛らし山笑ふ
猫跨ぎの汚名返上大目刺
皮も葉も乙な一品旬の独活
目一杯テンポルパート猫の恋
山独活のもてなしに酔ふ峽の宿

高崎 原田秀子

寒星や秘湯の宿の俳談義
道着より湯気立つ乙女寒稽古
指折りて数ふる余命薄氷
じやんけんで決まる席順クロッカス
春めくや櫟林に鋸の音

さいたま 染谷正信

独活食めば一氣に野生目覚めたる
歳重ね独活の天麩羅ほろ苦し
故郷に住む私の分身山笑ふ
独り言増えゆく日々や目刺焼く
揚げ立てのコロッケ提げて春の夕

熊谷 越田栄子

冬の陽や湯気もうもうと檜皮葺き

さいたま

和田仁八郎

階上るまたも待ち受く寒鴉
初雪だ故郷すでに非常事態
納豆の糸めがねに絡み春一番
紙雛を一つ折るたび願ふこと

飛驒染めの竜いきいきと寒晒し

保坂翔太

初恋は胸中にあり雪達磨
雪達磨残して郷を離れたり
七日粥ともに白髪を増ゆるなり
神名備の筑波嶺仄か冬満月

春一番びたりと閉ざす長屋門

反町 修

春入り日人情劇の一座行く
花冷や門扉に残る弾の痕
下萌や足の裏より湧く力
東雲の富士山頂の淑気かな

冬枯野息を継ぐごとと光りけり

曲淵徹雄

「読経にかぶさり鳴きぬ寒鴉
業平塚の肩たをやかに春を待つ
薄氷にためらふ鯉のみそかごと
春シヨールひかへめなれど艶ぼくろ

さいたま

笹本啓子

白魚や姪に小さき襟黒子
猫柳乗れば五分の渡し舟
けだるげな夢二のをんな猫柳
まんさくや隣に男児誕生す
春寒しナースは何時も小走りに

早春の梅の古木を慈しむ

塩野久子

予感のごと背筋ぞくりと春の風邪
一掬ひほどの白魚珍重す
水菜畑流るる水の滔滔と
早春の朝日に映ゆる檜林

灌木に芽生えの気配春浅し

東京 鈴木和子

海の青背にとどむる目刺焼く
艶めきて家居に惜しき春の宵
妹と酌む目刺のわたの沁み透る
清流をたどる参道山笑ふ

山あひの春日まだらの石仏

熊谷 神田治江

春近し石仏笑むも眼は虚ろ
早春や墨の匂ひの封ひらく
独活を食む夫婦はもちろん幸せに
春着着て照れ顔添へし童子来る

京菓食み一言なれど京ことは
白魚の椀に黒目のあふれけり
八十で始むる書道つくしんぼ
口実が本物になり春の風邪
「神の子」の復帰のニュース春早し

さいたま 新 曆文

風花は溶けて戻らず波の上
風花や湯の香ただよふ伊香保坂
横笛のひときは高く寒稽古
直会を待ちて意気込む寒稽古
風雪に耐へし銅像風花す

さいたま 新井孝磨

春めくや空のだんだん低くなる
鶯や肩のリユックを岩の椅子
トレイルは次の秘境へ路の臺
夕東風や浜は漁師の影を曳く
戦場の遠き思ひ出野焼かな

青木鶴城

春月夜人情嘶思ひ出す
情け立つ夜半の雨音遍路宿
春しぐれ「雨情」生家で一休み
春一番洗濯物を一捻り
野を焼けば掛声響く男衆

村杉清吉

クラシックを聴く牛の耳春浅し
白魚の儂さ故の光かな
大なのは八の字速し春はじめ
気づかれぬことも幸せ露の臺
蘇る若狭の風や蒸鱧

川口 野田静香

いつもの道今日気がつけば猫柳
カラカラと井戸壊れしや春の庭
春浅し手を太陽に透かして見る
露の臺己が枯れ葉を押し上げて
春暁や羅終へてみる静寂の海

梅澤輝翠

浮子睨む太公望や水温む
日溜りにひねもす一人猫柳
冬草に新たな気配かくれんぼう
春めくや小雨に煙る屏風岩
我が胸を焔が焦がす野焼かな

さいたま 日高道を

西域の仏像の笑み春来る
杭を打つ槌の音響く春の昼
春宵やインカの歴史読破せり
家族みな眠りに誘ふ春炬燵
パンジーの視線まばゆく歩を緩む

平塚 丸屋詠子

父の夢見しと母言ふ冴え返る
この空き地やうやく売れて犬ふぐり
来世では別の名欲しや犬ふぐり
恋仲になるのか否か猫二匹
片栗の花見つむればふるへをり

東京 石川理恵

引出しにしまふ友情桜貝
偽りの情報源や風信子
剣山の真中に決むる猫柳
黒煙に変はる白煙野火走る
海苔も売る村の駄菓子屋何でも屋

さいたま 橋本京子

初夢やまさに野望の月旅行
心情を覗くや寒の朝鏡
冬晴やけさ霊峰の雄大で
立春や時計の電池新しく
春待つや八十路のノブに手を掛けて

さいたま 加藤でん治

走り根に二輪咲かせて臥竜梅
盆梅の白一輪の世界かな
六地藏孕雀と遊びをり
通院の予約二月のカレンダー
小春日や縁側で読む師の句集

杉戸 佐々木史女

残雪や百の石燈上り詰め
ものの芽や母胎の稚児動き出す
春寒や待合室に間をとりにて
刺身よし焼魚よし春の宵
沈丁やひとり静かに香を聞く

若狭 山崎郁子

薄氷や大甕の雲棚引ける
威勢よき児らの足音春水
バス停に女優気取りの春シヨール
寂しみや妣の温もり春シヨール
出番なく箆筒に眠る春シヨール

春日部 諏訪サヨ子

酔客のふと梅の香に足を止め
薔薇の芽の威を振ふかに今朝の紅
大きくさめ隣家に届く朝まだき
枯芙蓉夜的一条戻り橋
飛梅の香に防人の影残し

伊予 向井章子

梅が香や閉園待たるる遊園地
「小生」と宣ふ作家梅真白
咽貫通す胃カメラ天皇誕生日
朝東風や水揚げに沸く漁師町
涅槃西風獲物へ鳶の急降下

東京 太田絹映

薄氷の解けゆく池面穂高岳

薄氷を踏む音響く山の朝

春シヨール花の香まとひ友来る

木洩れ日や修那羅道行く春シヨール

初午の雨豊稜を祈りゐる

春日部 仲田利子

白魚や椀に納まりその美白
強ごうの箱根駅伝返り花

茶所を春一番の昼下り

皮を脱ぎ水面に光る猫柳

縁側で猫とたはむれ猫柳

さいたま 小川洋子

春一番黒猫の上通り過ぐ

まんさくや乳飲み子あやす若き母

回診を告ぐる放送余寒かな

白梅の色薄まりし夕日影

早春やカーテン越の空青し

さいたま 鈴木藻好

野火猛るふいに沸き出づ太古の血
をとなへば草の芽しかと現はるる

春めくや児童の婦路の列乱れ

春の風スケボーの子の足捌き

火に翳す浅草海苔は艶増せり

斎藤みよ

冬枯の静寂をやぶる灯油売り

菊菜好き独りとなりし鍋の色

茹で過ぎし菊菜来し方思ひ知る

羽二重の肌がまぶしき春日傘

白魚や鯨気分で踊り食ひ

吉川 杉浦理恵

早春や天地がへしの鉄を振る
春の風邪我が身に七日宿りをり

返信を書く束の間の春炬燵

一束の水菜洗ふや母の掌で

竹筒に百円入れて水菜買ふ

篠崎紀子

忌に集ふ博多訛や梅日和

偉丈夫の僧の説法枝垂梅

飛梅や乳鋌浮き出る寺の門

碑面に届く夕日や梅三分

母の忌のめぐり紅梅匂ひたつ

さいたま 田中泰子

初夢や七福神の船に乗る
達磨売の名入半纏初参

良寛の軸の黄ばみや小正月

椿落つ我バイブルは「草枕」

我も又土に帰らむ霜柱

池田珪子

薄氷を剥がす光の容赦かな
残る雪何時か来た道かたほとり
街灯の薄れを覚ます沈丁花
春泥や猛スピードの対向車
メルヘンの世界に耽ける春の宵

若狭 岡本祥子

ツアー客の独りとなりぬ桃の花
淑やかに振る舞ふ姉妹雛の宴
揚げ油に大輪開く露の臺
春空に翼の下の富士眩し
灯台を息急き上り春の潮

さいたま 岡田宣子

春寒やゆつくりつかる終ひ風呂
春寒し終日猫と遊びたり
春寒の中颯爽と出勤す
青ぬたや一日の疲れ薄れゆく
青ぬたや仲むつまじき父と母

さいたま 高原和子

待たされしわれに微笑む冬桜
玄関前清めの塩や寒昂
満開といへども淋し冬桜
遊水地薄氷離る光かな
薄氷のあとに芹の根太き白

栃木 佐々木典子

予定表埋まらぬ日々や春一番
春一番墓の線香消し去りぬ
白魚やためらひつつも椀の中
踏む玉石の艶めいてくる春の雨
放課後の陣取り合戦猫柳

竹澤和子

巡りゆく因果応報冬銀河
検診の結果正常春まぢか
天狼が仰ぎ見入るは寒満月
億年の古き付合ひ冬の月
早暁の壬生菜を引くや露零る

さいたま 飯田忠男

濡れ色の沓脱ぎ石や春浅し
ふと見ればちんまり貌のふきのたう
青空にさそはれ散歩春一番
春一番思ひ巡らす骨密度
梅ふふむ三十余年の花の香に

高橋敏子

春めきて小川流るる音清し
野焼の火夜を徹し燃ゆ地平線
春一番猿沢の池揺らしたり
大仏の半眼開き春一番
猫柳割るる花卉の華やかさ

千坂平通

寒暁のラジオ体操行者めく
雪予報鍋のおでんの膨脹す
主恋ふ遠吠え哀し虎落笛
壮年の父母居ます青木の実
人違ひさるるマスクと冬帽子

さいたま 本橋稀香

猫柳門出の風を輝かせ
海の色まだ残りたる目刺焼く
青空に凜と先どり梅の香よ
縄跳びに闘入するや春一番
髪乱るるも何かわくわく春一番

さいたま 菅原真理

春隣日ごと整ふ目鼻かな
白鳥や空の青きを残り行く
再読のあらたに愉し冬障子
新聞にくるみて持たす寒卵
青空の煤けて見ゆる二月かな

若狭 檜鼻ことは

冬桜広場陣取るちび球児
薄氷や轍乱るる曲り角
春水転ばぬ先の青信号
春シヨール籠の鳥ごと枕元
春めくやけぶり立ち初む山の小屋

安倍弘夫

羊飼ひの如くに動く野火の人
落味噲は妻の香りの三番目
屠蘇機嫌百まで生きる気になりぬ
めかり舟竿さす漁夫の力瘤
雪積り活気出でくる北の国

さいたま 川村 治

満開の白梅の空真青なり
ほろ苦き目刺丸ごと夕餉かな
外出にけちをつけたる春の雨
野の川にぎんねずやさし猫柳
初詣願ひをこめて袋絵馬

森下美智枝

如月の薄き日差しや水路橋
笹鳴の高まる一日帯祝
無住寺の雑木の辺り笹子鳴く
春浅し弁天様の土人形
球根の中の一つが芽吹きたり

霜多光代

玉椿蜜吸ふ虫を包み込み
目ン玉も凍りつくよな修験徑
薄氷はがし目高の影を見る
佗助や友は小さき壺の中
挨拶も無く逝きし友紅椿

和歌山 嶋田洋子

手作りす家族四人の恵方巻
術前の不安あれこれ福寿草
福寿草まぶし術後の眼閉つ
散歩道臘梅の香の何処より
寝入りばな震度五の揺れ春寒し

蕨 細井良子

たわい無き諍ひ果つる桃の宿
菜の花の合性よろし芥子和へ
草も木も挙りて踊る雨水かな
何かあるきつとあるはず春一番
春の湖木の間を遊ぶニンフかな

さいたま 綿貫ひさの

白きもの睫毛に宿り冬終る
おばんざい京菜はんなり煮えてをり
登城坂追うて梅が香上り来る
全力で遊ぶ保育士良寛忌
白衣からボタンの取れし茂吉の忌

大阪 遠藤人美

早梅の白妙なれば見とれけり
里帰りする嫁へと寒の餅
竹林のゆれにゆれたり春一番
コロナ禍の声をひそめて豆を撒く
愛犬と少し遠出や春隣

鬼石 榊原聰子

春の風邪散歩せがみし飼犬よ
夢うつつ砂のうねりや春の風邪
春浅し携帯探す発信音
薔薇芽吹く棘より太き紅に
梅東風や終活ノート書き始む

さいたま 山戸美子

ワクチンを打たぬと夫は独活を食む
花東のやうに独活抱き坂下る
とばり揺れ隙より入る春の色
モノクロの夢から覚めて春愁
モカの豆ひとり分挽く春夕べ

東京 飯室夏江

葉包紙律儀にたたみ梅白し
屋敷門紅き梅散り化粧さる
下萌やわづかな希み託したり
土手青み高層ビルの影を踏む
草萌えて白髪頭が追ふ白球

東京 畑宮栄子

老いてなほ踏ん張る紅梅天仰ぐ
小鳥来る地苑は亡母の梅香満つ
インバネス父亡きあとは娘のオーバー
自転車の手入れの孫に春の風
傘寿なり免許返納小春の日

藤沢 小島喜代子

針穴の小さきに倦み猫柳
バレンタイン小さき嘘を箱に詰め
カプチーノミルク増量東風吹きぬ
夕東風や鈴懸落とす名残の実
雲雀東風満艦飾を翻し

東京 山中いちい

墨の香をのせて賀状の友の筆
庭隅の小さき草にも寒の入り
梅開き人みなやさし里の道
深深と身にあつめたる寒さかな
墨に手の温もり移る冬日和

さいたま 水野興二

青饅や母より伝ふさしすせそ
青饅の惜しまぬ手間に味を上げ
青ぬたの青で引き締む志野の鉢
踏青や狭き土手道会釈して
ステッキの歩幅に合はせ青き踏む

さいたま 森 和子

百僧の洗心の経冬の朝
菰まきし地蔵の水やうす水
牙返る星座も郷も一回転
薄水やおそるおそる人の世行く
夫起しコーヒーで始まる冬の朝

小浜 松島寛久

雲も縫ひ雲追ふ冬の月明かし
日脚伸ぶ畑に置きざり耕運機
夜の地震しづまる窓を梅の風
三寒四温街にコロナの棒グラフ
泣きさうな空を押し上げ山笑ふ

横浜 山岸弘子

藍に染め乾したる生糸春一番
豚しやぶの水菜の香り一人膳
春寒し古き果実酒円やかに
白魚の美味堪能の踊り食ひ
強腰に世間の風やうす水

さいたま 野村美子

初春の母の遺愛のお重かな
寒稽古白き稽古着染みの跡
まんさくや吾子のダンスの足絡む
金縷梅や今はさびれし村の辻
まんさくや吾子の頭の毛が絡む

さいたま 武田重子

落味噲は妙味の深き酒の友
鴉啼き羽ふるはすや春浅し
どんよりと空も泣きをり浅き春
草も木も首をすくめて春浅し
着る服のきまらぬ朝や春浅し

川口 山岸久美子

立春や小門より出で深呼吸
春浅し日曜朝のヴィヴァルディ
風光り笑ひ転げる娘たち
賑はひてやがて寂しい雛祭
雛壇を飾りてひとり涙ぐむ

さいたま 小林京子

万歳をして吾が家に來たるシクラメン
乗り替へてお国訛りと雪の富士
大洗濯風が頼みや日脚伸ぶ
マスク十枚風と遊べり日脚伸ぶ
ぱつと出て喜ばしたる路の臺

横浜 川島典虎

冴えわたる満月星を統ぶること
オオカミの餓ゑの遠吠え冬満月
目刺焼き思ひ浮かべし父の膳
しやきしやきと水切る心地京菜かな
諍ひの果ては無口に春浅し

越谷 阿部幸代

見沼田に光あふるる雨水かな
芝川の光をかへす雨水かな
床の間にはつと華やぐ桃の花
桃の花母に供へる父の顔
故郷は女系家族や桃の花

さいたま 木村るみ子

水温む湖東に寄する波優し
齋宮の身を清めし川水温む
舟の波寄する川岸水温む
貴婦人なる木の芽ふくらむ奥日光
春寒し薬師三尊寄り添ひて

草加 外村紀子

双六の禍なき月へと賽を振る
曲がりたる鉄柱ひとつ下萌ゆる
あみだ籤のやうな枝影梅ふふむ
下萌や新幹線の園バッグ
おがくづの寝床まどろむ春の馬

川崎 鈴木玲子

句誌を手になたな舟出春時雨
ままごとのやうな独りの春御膳
紅梅のルビー散らして空真青
白梅の木札出自の真新し
ただいまの声に紙雛弾みをり

さいたま 清水桂子

春夕日頼れる人の有難さ
亀鳴くや主より長く生きるかも
自転車を変へて浮き立つ春の午后
バレンタインラム肉食べる二人かな
像の牛でんと座りて春を待つ

和歌山 南條さわゑ

段々にぐるり色めく春の景
格別のみそ独活にのせ食前酒
子らの声散り散り帰る春疾風
名人の籠にゆさゆさ山の独活
大げさに独活の歯応へ褒める夫

さいたま 緒方みき子

河豚刺の菊の模様が皿に咲く
竹筒の寒九の水を飲み干しぬ
顔洗ふ桶満満の寒の水
寒稽古真つ赤な足が畳蹴る
寒稽古身を硬くして一礼す

さいたま 湯浅 和

コロナ禍の電話長かり浅き春
山菜莢のぼきんぼきんと折りだめす
芳名録無し受付梅白し
ゆるる花器両手で支へ春の地震
春になる両眼の手術終へし声

和歌山 葛城千世子

追ひついて鬼に踏まれしいぬふぐり
冴え返る急行電車の通過あり
こみ上ぐる再会うれしふきのとう
梅林いよよ白みて匂ひくる

東京 柳父はる

ヒヤシンス出窓は猫の指定席
訳ありの物件捌けぬ薄紅梅
狭客の碑の深彫りに夕永し
シャッターの音の軋みて冴返る
縁側に孫や曾孫やしやぼん玉

いすみ 平石睦子

里山の千両太鼓春を待つ
むずむずとコロナとまがふ花粉症
第一便のワクチン届く春の空
春浅きワクチン接種の順を待つ

和歌山 高橋満耶子

ふんはりと物語かのやう春の雲
霏かかり遠景霞む春の八ヶ岳
千切れ雲落書ゆるり春の空
自粛とて時に口実春炬燵
北の窓開けてコロナ禍掃き捨つる

東京 河原叔子

ハンカチの中しほかせとシーグラス
遺句集のひそかな湿り半夏生
大花火開けばすぐに消えゆけり
むさしのに生れて五月雨うるはしき

所沢 関根千恵

さらさらと海へ空へと春の淀
下街の灯りとなりて実南天
逞ましき野良猫に惚れ雪の夜
馳走持たぬ我にまつはる子猫かな

大阪 飯塚智恵子

冬籠パリもコロナ禍メール来る
白梅光和氣藹々の父母法事
寡黙なる祖父は目刺にコップ酒
卒業を前に退学二冠棋士

宮代 関谷多美子

食べ頃の土筆選るのも主婦の勘
洒落たベンチに土筆置き去り遊歩道
外出自粛土筆の袴取り飽きず
水温むつい口をつく内緒事

さいたま 北出久美子

牙返り血圧数値乱れがち
牙返る備忘録なる掌に
犬ふぐり除く葉っぱの奥に尚
犬ふぐりボール蹴る兎に大拍子

東京 水落守伊

手作りの露味噌の味家伝なり
日の入りの風ひんやりと浅き春
春浅し遠山並は靄の中
春浅し未だぬるまぬ朝の水

川口 田村福美

初孫の公園デビュー浅き春
あをぬたや量を過せし今宵酒
就活の一人暮しやしじみ汁
浅き春人待ち顔の子猫かな

さいたま 山下ユリ子

露の臺晴夜の星に懸想する
西窓に淡き残照春浅し
しなやかに露味噌練るや白き指
朝の庭幹のしめりや春浅し

新井のり子

願ひ秘め護摩待つ寺に春浅し
ささくれの指にクリーム春浅し
朗報来うぐひす餅を食む部屋よ
春兆すびよんと兎の出る園のバス

橋爪さなえ

浅き春何故かうれしき散歩かな
春浅し入学を待つ子の瞳
露味噌を友の勧めで試食せり
浅春や東の空に星きらり

さいたま 遠西勢津子

消ゆる灯を六つまで数ふ夜半の春
掌温るむ無色なる息雨水かな
猫の子や可愛いだけが取柄なの
月おぼろ流すラジオはオールデイズ

横山 礼子

倒木の上に白花雨水かな
赤物にそつと寄り添ふ桃の花
源平の桃咲く里を歩きけり
常春花亡母に届け海の音

さいたま 小駒さち子

東風の中通り抜けゆくデイスタンス
猫柳桃色黄も生け込みぬ
銀鼠のいぶき生け込む猫柳
屋上へ出でて強東風足すくむ

さいたま 伊藤保子

春浅し欠伸一つの渡し舟
鶯替は夢と現の橋を架け
猫さかるうつらうつらの怠き午後
山笑ふなぞへの先に朝上がり

草加 持永喜夫

寒復習確と帯締め大鏡
矢舩にブーツが似合ひクロッカス
露の臺厨の水の走り出す
料峭や堀黒々と古都の町

森美枝子

指切りの明日の約束猫柳
東風の中耳おほきくし君を待つ
梅東風や絵馬に願ひをちひさな手
影富士や見沼の大地東風の中

さいたま 福田育子

畦道の鎌跡すがし青き踏む
青饅の酔味噂の想ひ母の香
青饅を小町の絵皿美女ありき

落合和枝

白梅や灯りに浮かぶ色と香と
群青の海と対峙す野水仙
小ひささに母の姿を冬桜
春立つや小走る息の淡くなり

奥山粉雪

努力すも浅学非才昼寝人

小川 藤間友二

もぞもぞと蠢動お蚕がざわざわと
春時雨粋な蛇の目が利根渡る

寒晒し蕎麦若返る妹の声
春を待つ切り株眠る棚田かな
櫻樹の花色匂ふ雨水かな
桃の花客間に流るシウトラウス

秋谷信一

春浅し合格祈る湯島社

さいたま 高岸 順

鶯に今を生きよと教へられ
合格を三世で祝ふ雛祭り

鶯の初音に出遭ふ朝の道
種芋を植うる畑の土温し
山笑ふ何やら鳥のせはしなく

さいたま 川島まり子

ご褒美にベルギーチョコと桃の花
桃の花一本活けし誕生日
コロナ禍の妄想旅行花便り

樋口元美

紅の日を受け映ゆる猫柳
猫柳銀色の衣まとひけり
強東風や髪の乱れをり散歩かな

春日部 増田静司

☆

☆

通信添削指導のご案内

季音同人を除く水明会員を対象に、通信添削指導を実施しています。

希望者は、下記により作品を送って下さい。

主宰 山本鬼之介

[指導者] 網野月を

[作品] 7句 [受講料] 1,000円

[方法] ①用紙自由 ②住所・氏名・電話番号を明記
③84円切手を同封
④返信用封筒は 不要 ⑤締切なしで随時受付

[送付先] 網野月を

〒336-0025 さいたま市南区文蔵1-13-3-401
電話 048-862-5926

作品評

山本鬼之介

庭の色動き出したり落の臺 横山君夫

露の臺が生える一般的な場所と言えば、野原や野道、土手や田畑の周辺などであるが、住まいの庭となるとまた違った趣がある。実際には冬そのものの寒さが確りと残っている時期に、土の上にはほんの少し頭を出した露の臺に、人々は敏感に魁の春を感じるのである。

紅葉はすっかり葉を落とし、千両や万両などの赤い実は鳥に啄まれ、山茶花は花卉を散らして姿を消すなど、秋の終りから冬の間の庭は華やかさを失う。それが、霜柱を突き破って現れた露の臺を筆頭に各所に下萌が始まり、木々が芽吹きをはじめ、人は敏感に季節の動きを感じる。作者が我が家の庭の微妙な変化即ち春の訪れを、目と心で感受したのである。

早春やただなんとなく銀座まで 渋谷きいち

地上に草花が芽を出し、木々の枝が芽生え、小鳥の鳴き声

が賑やかになってくる早春。人もそれらと同様に動きが活発になってくる。これと言った目的の無いまま家を出て、最寄りの駅から電車に乗り、沿線の景色をぼんやりと眺めながら有楽町駅に到着。コロナ禍が一向に治まりを見せず、騒然とした日々が続いているが、結構人出のある銀座の街並である。銀座一丁目から八丁目方面へと、名店をひやかして銀座ぶらぶらを楽しみ、七丁目の老舗ビヤホール「銀座ライオン」で大ジョッキをぐいっと、と言ったところであろうか。俳句では「ただなんとなく」と書いているが、それがかえって楽しい一日を過ごすのに都合が良かったのかと思う。

涅槃西風夜の塔婆は話し出す 西幅公子

歳時記の解説によれば、「涅槃西風」は、「釈迦ねはんが入滅した陰曆二月十五日（涅槃会）頃に吹く寒さの残る強い西風」となっているので、それと塔婆との接近しすぎが少々気になるところである。しかし、墓場の各所に、重なり合った薄い板状の卒塔婆が、強風によって揺すられ、かさこそばたばた不気味な音を立てている実景を想像すると、この特異な名称の風が効果を成しているように思えてくる。卒塔婆が騒ぎ出すにはもってこいの場所と時間であり、「話し出す」の擬人法表現が、不気味な夜の墓場風景の演出に功を奏している。

山独活のもてなしに酔ふ峡の宿

原田秀子

古い時代から畑で栽培され、食用に供されてきた独活であるが、山野に自生する山独活は、香気が強く味も濃いと言う。山で採れる自然薯と同様に、泊まり合わせた客にとっては最高のご馳走で、申し分のない満足感を与える。観光地にある一流の温泉旅館のような行き届いたサービスは無いが、天然の産物を食べてもらおうという宿の主人の心意気とその味に、客の心が素直に呼応する。いや、心だけではなく、山独活を肴に呑むその地の酒で、心地よい酔いを享受する。

寒星や秘湯の宿の俳談義

染谷正信

外に出ると身を切られるような冷気が襲ってくる。夜空一面に青白く冬の星が瞬いている。弘法大師が開いたと伝えられている山の鄙びた温泉。山で捕獲された猪のぼたん鍋や保存されていた山菜と川魚など、素朴な料理での宴の後、軽く句会をやつてから地酒を酌みながらの俳談義と相成つた。次第に熱を帯びて深夜まで続いたが、疲れ果てて一人また一人と落伍してゆく。さて、最後まで残つたのは誰だろう。

故郷に住む私の分身山笑ふ

越田栄子

生れ在所を後にしてから永い年月が経過したが、心は常に故郷に向いていた。まさに「我が分身」と言えるその心根である。季節の巡るごとに故郷の山河に思いを馳せる作者。故郷の山々もやつと春の装いになっただろうと思つている。

冬の陽や湯気もうもうと檜皮葺き

和田仁八郎

檜皮葺きは、細かく裂いた檜皮ひわだ「檜（ひのき）の樹皮」を用いて葺いた屋根のことである。ちなみに、檜皮葺きは、古より神殿や宮殿などの建物に多く用いられてきたようで、自ずと厳かな雰囲気伝わってくる。降り注ぐ冬の陽光によって、雨か雪で湿つた檜皮が温められ、檜皮葺きの屋根全体から朦朧と湯気が立ち上っている豪壮な景観である。言葉の幹旋と構成が巧みで、臨場感の溢れた格調高い俳句である。

神名備の筑波嶺仄か冬満月

保坂翔太

神名備かみなびを易しく言うと、「神の鎮座する山や森」の意のようである。関東平野の北東部に位置する筑波山は、西に位置する富士山に対して東の筑波山として古くから親しまれてきた。霊峰筑波山をご神体とする筑波山神社は歴史が古く、多くの人々に信仰されてきた。浦和バルコの10階から時折遠望している筑波山が、この句によって、普段の印象とは違った神々しい山として筆者の心に映し出されてきた。

春入り日人情劇の一座行く 反町 修

本句を読んでちよっと躓いたのが「人情劇」の言葉である。国語辞典を引いてもこの言葉が出てこない。下五の「一座」から推測して得た筆者なりの答は、「大衆演劇」いわゆる旅芸人である。東西南北日本国内各地を巡る旅興業は、江戸時代であれば荷車を曳いての徒歩の旅であったが、今は当然のこと自動車や電車を利用しての移動である。或る地方都市に着いた一座が、道行く人々に公演の宣伝ビラを配りながら、春の夕陽が射す町を歩いている、という光景を描いてみた。しかし、どうもすつきりしない。俳句から浮かび上がるのは、山のような荷を積んだ大八車を真ん中に、次の宿場へ向かって土手道を歩いて行く旅の一座の姿である。現実的ではないが、これがいいのだ。

春シヨールひかへめなれど艶ほくる 曲淵徹雄

地味な春シヨールを羽織った女性であるが、反作用として「艶黒子」が衆人の目を引き付ける。という句意であるが、さて、この黒子は如何なるものなのか。調べてみたら、口元の斜め下にある黒子であることが判った。文字通りなかなか艶のある俳句である。

けだるげな夢二のをんな猫柳 笹本啓子

竹久夢二が描いた女性には独特の雰囲気が備わっており、今なお多くのファンがいる。掲句に書かれた「氣怠げ」が、夢二の描いた女の特徴を端的に表していると思うが、多分絵の脇に生けてあると思われる猫柳の触感から、視ている内に絵の中の女に取り籠まれてしまうような気がする。竹久夢二と年齢が近い高島華宵・露谷虹児・東郷青児、そして彼らより少し新しい時代の中原淳一らが描いた魅惑的な女性画を思うと、胸がわくわくしてくる。

早春の梅の古木を慈しむ 塩野久子

梅は早春の季語になっているが、立春前から咲き出す梅もあるように、露の臺や土筆などと同様、春の到来を真っ先に報せてくれる花である。何十年もの間、その季節になると、律儀に花を咲かせて家人の目を和ませてくれる。であるから家人もその古木を労り風水害や害虫から守っている。以心伝心の関係なのであろう。

妹と酌む目刺のわたの沁み透る 鈴木和子

じっくり焼いた目刺で日本酒を飲む。シンプルではあるが、鯛で酒を飲むのと同様、酒の美味さを引き出す飲み方なのではなかるうか。酒道を心得た姉妹に感服した。丸齧りした時

に口中に広がる目刺の腸の独特の苦みを珍重するとは大したもののである。一度仲間に加えていただきたい。

早春や墨の匂ひの封ひらく 神田治江

毛筆で書かれた手紙をもらつた。手紙をもらうことは嬉しいもので、しかも毛筆の手紙となれば尚更だと思ふ。まだ肌寒い二月某日、早春を象徴するかのような墨の匂ひに、やや興奮気味に封を開く。その瞬間の気持がよく表されている。

京菜食み一言なれど京ことば 新 曆文

京菜＝水菜は、二、三月の菜物の少ない時期に出回るので、便利に使われているようだ。さつぱりとした味と菌触りで、漬物・煮物・お浸しなど用途が広い。古来、京都を中心に栽培されてきたので、関東地方では京菜と呼称することが多いと言ふ。ある小料理屋で京菜の漬物が出た。口にしてその味の良さに、思わず以前京都で習い覚えたはんなりした言葉で誉めたのであらう。

春めくや空のだんだん低くなる 青木鶴城

空を高く感じる時季は、日本全土では十月、太平洋側では、十月～十一月であろうか。大気中の湿度との相関関係で、湿度の低い時季は空が澄み渡って高く見え、湿度が高くなると上空がもやもやして低く見える。身に感じる春先の圧迫感を

上手く詠んでいる。

大なのはの八の字速し春はじめ 野田静香

昔の小学校では、授業の始まる前や時限の間の時間を利用して縄跳び遊びに興じたものだが、現在はどうなっているだろう。特に外気の冷え込む冬には、回す輪の中に次々と入って行つて時には十人くらいになることもあつた。懐かしい光景が戻つてきた。

日溜りにひねもす一人猫柳 日高道を

沼か川の岸辺で日がな一日釣りを楽しんでる人だろう。他人が見れば、よく飽きもせず……と思ふだろうが、当人は無我の境地である。傍らの猫柳が優しく見守つている。

海の色まだ残りたる目刺焼く 菅原真理

スーパーで売っているような物ではなく、漁港に荷揚げされた鮮度抜群の鰯の目刺だと思ふ。持ち帰って焼いていると脂が滲み出てきて、その目刺が海へ帰って行くように感じた。

目ン玉も凍りつくよな修験径 嶋田洋子

修験者が修行する三大修験道の一つ大峰山(奈良県)中での山伏の荒行の径であろうか、寒気によって凍りついている。上五から中七の措辞が迫力満点である。

水琴窟

(水明集三月号鑑賞)

池田雅夫

おだやかな日なれば障子開け放つ

細井良子

星野立子の句に「日の温み障子いよいよましろなり」がある。その真つ白な障子をも開け放ちたくなる穏やかな冬の日なのであろう。冬は晴れていても日差しは弱く頼りないものである。掃除、洗濯にと、忙しい一日になったことだろう。

分校の玻璃を震はす冬の雷

森 和子

山間の鄙びた村の分校だろうか。平屋の木造分校舎のガラス窓。立て付けが悪く風が吹くとガタガタ音をたてる。冬の村は閑散としていて、突然の雷に先生も児童もびっくり。ガラス窓はもとより、村全体が震えたように思えた。

相槌の上手き女将や冬の暮

檜鼻ことは

料亭の女将であろう。愛想よく客に接している。小料理屋や居酒屋などでも女将の人柄に惹かれて通う人も少なくない。酒でふえた口数の客に絶妙な相槌。さらに酒がすすむ。冬の寒さをやわらげるのは酒にもまして女将の愛想の良さなのだ。

朝散歩肺まで吸ひ込む寒気かな

南條さわゑ

寒さが厳しくなっても朝の散歩は止められない。むしろ、寒いからよけい気を引き締めているのだろう。「肺まで吸ひ込む」に気概が感じられる。寒気で肺が痛くなることがある。

入院の主人待つかに帰り花

北出久美子

体調の不良で入院を余儀なくされた。その間に時ならぬ花が咲いたのだ。単に「帰り花」といえば桜のことだが、あえて限定しなくてもよいだろう。花の視点で詠んでいるが、それは家人の気持ちでもある。一日も早く退院を願っている。

光陰の中に一つの蜜柑むく

松島寛久

「光陰」の光は日で昼間を、陰は月で夜を表わす。転じて時間や月日、年月をも意味する。その中で「一つの蜜柑むく」と詠んでいる。日常の一つ一つの積み重ねがすなわち人生であると悟っている。「蜜柑」が幸福、安心の象徴として。

咳こみのひびきて夜半の北病棟

榊原聰子

病院の夜は静かで、廊下では人の気配が感じられない。入院患者は寝静まり、時たま咳込む声をやたら大きくひびくのである。「北病棟」が悲愴感を一層強めている。中七の「ひびきて」を「ひびくや」として切れを入れてはいかが。

尻餅を二度も三度も芋掘る児 嶋田洋子

可愛らしい句に共感した。今でも幼稚園などで芋掘りの行事を行なっているのだろうか。観光の一環として芋掘り体験をするところもある。非力な幼児が力いっぱい引つ張るが、力の加減がわからないせいか、何度も尻餅をついている。

しきたりを一つ外して年用意 平石睦子

「年用意」は新年を迎えるための用意である。煤払、注連飾り、門松作り、餅搗など「しきたり」に従って準備するものの、当世に合わないこともある。「しきたりを一つ外して」の決断にいたく共感する。伝統を守ることも忘れていない。

石路の花古刹の一隅なほ静か 湯浅 和

「石路の花」と「古刹」が互いに引き立て合って、句に厚みを与えている。花の色のわりには香りがなく、静かさの要因であるかも知れない。中七の八文字を解消するには語順を変えなどの工夫をすることも楽しみの一つである。

静かなりなんと静かに山眠る 小山敦子

「静か」と「山眠る」としか言っていないが、相槌を打って納得した。この句においても語順を変えてみると、また違った趣になる。例えば「山眠るなんと静かに静かなり」。

保育所へマスクのサンタ現はるる 高橋満耶子

コロナ禍の影響が思わぬところに及んでいる。まさかサンタクロスも困惑したことだろう。クリスマスは子供らにとって最大級の行事で、中止するわけにはいかない。「マスクのサンタ」をユーモアと受け止める余裕があるだろうか。

白みゆく坂東太郎寒霞 藤間友二

「坂東太郎」は利根川的美称で、親しみと敬意を表わす。寒中であっても関東付近では霞がたつ。夜明け前の混沌とした闇が次第に白みきて、一面を被う雲のような霧のようなガスに包まれ、幻想的な世界を作りだしている。

初詣絵馬に一願書き納め 工藤信子

初詣にもコロナ禍が影響を与え、例年の参拝の人混みが見られなかった。せめて絵馬に願いを書き記したのである。どんな一願だったのかと想像してみよう。「書き納め」には、「書いて終りにする」の意味もあるので正しく理解したい。

軒下に光る大根原風景 樋口元美

「光る大根」の措辞が印象に残る。懸大根であることは明白。かつての風物が、都会ではほとんど見かけられない光景ゆえに「原風景」の情緒を十分に味わっているのだ。

網野月を選

山紫集

海神に愛さるる鳥猫の恋

野田静香

逢ひ引きは極ぐねの中猫の恋

野口和子

猫の恋東下りとなりにけり

宮崎紫水

若き日の友の訃報や猫の恋

仲田利子

少年の金髪ちぢれ毛猫の恋

内田恵子

そんな眼をしたたのわたし猫の恋

石田慶子

生垣の穴は我が道猫の恋

岡野順子

恋猫やコラム音読してをれば

石川理恵

飛行機雲追ふ事もせて恋猫は

河野はるみ

「尋ね猫」の張り紙破れ猫の恋

福田千春

恋猫の張手に倒ける招き猫

横山君夫

猫の恋コンビニ入荷の深夜便

川崎道子

テノールもバリトンもあり猫の恋

原田秀子

待ち呆け悔いず恋猫闇に立ち

神田治江

ひとすぢにいかぬ恋路も猫の恋

越田栄子

——以上特選

恋猫の封鎖破りて遁走す

後藤綾子

恋猫の風に抗ふおらび声

諏訪サヨ子

「我輩」の惹かるる三毛子春の猫

近藤徹平

恋猫のアルトテノール野外オペラ

関谷多美子

築地塀の高さを如何に恋の猫

斎藤みよ

陣太鼓打つて恋猫送り出し

染谷正信

恋猫や渾身の声走る闇

佐々木典子

恋猫の戻らぬ今宵雨模様

高島寛治

疲れ果て膝に寄り来る恋の猫

笹本啓子

門限に遅ることなく春の猫

高橋満耶子

猫の恋闇に切なく狂ほしく

佐藤克之

庭石の陰に構ふる猫の恋

武田重子

「決戦は金曜日」唄ふ恋猫

渋谷きいち

うらやましつるみし猫に傷一つ

田中章嘉

恋猫の武人を気取り戻りけり

下川光子

もんどり打つて凄む恋猫夜の廂

十倉和子

軒下は恋猫の路闇迫まる

菅原真理

猫の恋交はる闇の深さかな

鳥羽和風

恋猫は肉食女子の元祖かな

杉浦理恵

恋猫に聞耳たてて自己嫌悪

飛永 鼓

破れども翌朝も又恋の猫

鈴木和子

恋猫もありや振られて落ち込む日

外村紀子

猫の恋三日三晩の家出かな

鈴木藻好

内海の隠れ岩場や猫の恋

南條さわゑ

子の遊ぶ玩具蹴散らし恋の猫	西浦千枝子	恋猫や我が心配をうはの空	村杉清吉
押し入れに傷舐めてゐる猫の恋	西幅公子	ひよつこりと戻り擦り寄り恋の猫	森川義子
一昨日の飯そのままや恋の猫	橋本京子	陽だまりの特等席や猫の恋	森下美智枝
人間は外出自肅恋猫は	日高道を	激震に一目散の猫の恋	森田祥絵
うかれ猫今宵B面先斗町	藤澤 喜久	恋猫奇声立ち往生のタマとトラ	森本早苗
恋猫が毛並み整へ背戸を出づ	保坂翔太	猫の恋怪しい声は納屋の裏	湯浅 和
声に酔ひ酔へばなほ鳴く猫の恋	曲淵徹雄	置き去りの赤児ゐるらむ猫の恋	青木鶴城
独り身の我に当て付く恋の猫	正木萬蝶	私の業すこし羨む猫の恋	新 曆文
眠かろう辛かろう傷心の恋猫よ	町野広子	さ迷ひ来傷跡深き恋の猫	阿部幸代
ぐづり鳴きして恋猫の朝帰り	松井由紀子	三日三晩傷の語らふ猫の恋	安倍弘夫
レントよりいきなりアレグロ猫の恋	丸山マシミ	去勢して恋には疎き猫なりし	荒井俱子
ひとり身の胸に響くや猫の恋	宮崎チアキ	恋猫の額に確と向う傷	池田雅夫

一途てふ愛は尊し猫の恋

井関礼子

路地裏の丑三つ時や猫の恋

千坂平通

恋猫の闇をつんざく太き声

井上玲子

猫の恋泣いて怒つて傷つけて

新井孝磨

犬残し宵に抜け出す猫の恋

井口俊晴

恋猫の傷なら三日人三年

水落守伊

恋猫の尻尾を立てて凱旋す

上戸千津子

恋猫や二階の窓より脱走す

伊藤敦子

猫の恋うねつた畑蹴ちらして

梅澤輝翠

恋猫の狼藉ゆるす齡かな

山岸弘子

恋猫の泥の如くに眠る朝

梅澤佐江

朱の鳥居祈りの道よ猫の恋

山田美佐尾

吾輩は艶福生る猫の恋

大塚茂子

恋猫の闇とんで闇艶めけり

大場順子

夜つびて競り合ふ艶歌猫の恋

小倉倭子

恋猫や小町通を地でゆきぬ

柚木治子

☆

☆

鈴鳴らし時に横飛び恋の猫

熊倉千重子

コロナ禍の隠れてしまふ恋の猫

葛城千也子

山紫集作品評

網野月を

むろん、「恋猫」が「飛行機雲」を追うことは出来ませんが、「恋猫」だからこそ「追」わないということが諧謔なのです。中七の構成はサ変動詞「す」の未然形と助詞「で」です。座五の「……は」は確定を示していて効いています。

「尋ね猫」の張り紙破れ猫の恋

福田千春

恋猫やコラム音読してをれば 石川理恵

座五から上五にリフレインして句の意味を作る構図です。コラムの客観性と「恋猫」の声の主観性の対比が見事です。季語「恋猫」の本意の広がりを用意しています。対比の唯一の共通性は聴覚によるものです。聴覚に拠る認知で取り合わせ句の統一感を演出しています。

普通、俳句においては、「……ば」の未然形もしくは仮定形に接続する構成は避けるのが普通です。つまり架空の事柄になることがあって事実を叙述するという建前の俳句にはそぐわないのです。ただし古語（文語）での已然形＋「……ば」は確定条件を示すものです。掲句はむろん已然形でのそれです。

飛行機雲追心事もせで恋猫は

河野はるみ

斬新で新味ある句です。猫尽くしではありませんが。飼い猫を探す人為といわば猫が微妙に交錯しています。恋猫の本意を用意して、句意を超えています。技法的には特に複雑なところはありますが、その分読み手にすんなり浸透するようです。現在の『広辞苑』では「張り紙」も可ですが、本字は「貼り紙」でしょうか。

恋猫の張手に倒ける招き猫

横山君夫

「招き猫」は右手、もしくは左手を振りながら、様々なものを招いています。手を振っているのは「招き猫」の方なのです。掲句では手を振っているのが上五の季語「恋猫」の方であって、この点が俳諧です。句意の視点に気が利いています。「倒け」た「招き猫」も驚いたでしょうが、「恋猫」も奇妙な感覚ではなかったかと思われれます。

猫の恋 コンビニ入荷の深夜便

川崎道子

上五の季語「猫の恋」と中七と座五の句意が取り合わせであり、拮抗しています。ともに夜の出来事であることに共通性があるのですが、両者ともに作者の視野に入っていたというばかりではなくて、恋猫を牽制する「深夜便」を思い浮かべることが出来ます。もしかしたら「深夜便」をものともせず恋猫は活躍していたのかも知れませんね。

テノールもバリトンもあり猫の恋

原田秀子

テノールもバリトンも男声ですから、想像に難くないところですが。筆者は猫の生態に詳しくありませんが、ソプラノやアルトはないのでしょうか。若干の既視感がある句意であり、別句にも同意の句がありました。掲句が秀抜です。

海神に愛さるる鳥猫の恋

野田静香

座五の季語「猫の恋」に対して、上五中七の句意は意表を突くものです。「猫の恋」の空間的な枠組みを指定しているとも読み取れないわけではないのですが、実に神秘的な恋を演出しているようです。情報量が少なく、空間的な認定が確定しません。

逢ひ引きは檜ぐねの中猫の恋

野口和子

上五の「逢ひ引き」と座五の季語「猫の恋」ががちりとタッグを組んでいます。そして中七の「檜ぐねの中」という空間の提示が実在感を示しています。一見ベタな表現のようですが、ここまで詳らかに表現して具体性を示すことが出来る。「猫の恋」の季語としての概念性を払拭します。

猫の恋 東下りとなりけり

宮崎紫水

この句も判じ物の域内の句かも知れません。何が、どのようにして「東下り」するのかが分からないのです。精緻な鑑賞の域を超えているようです。形式的に推測すれば、「東下」となりけり」というのは作者であって、「猫の恋」の時期になのか、「猫の恋」を聞きながら荷造りでもしているのか、ということになります。恋物語も判じ物ですが、何やらストリー性を感じられるのです。

若き日の友の訃報や猫の恋

仲田利子

座五の季語「猫の恋」が慰めをもって用ひてくれているようです。「訃」と「恋」は生として相反するもので、「若き」と「訃」は人生のはじめと終わりを示しています。

大村節代 選

鼓
笛
集

お迎へのバスにべそかく入園児
入学式ポニーテールを三つ編みに
大きめの制服気にし入学す

たんばばや虫めがね手にシャーロック
ホルン背に青き楽団行く春野
細き眉見つめゆるりと雛納

春愁やへそまがりの血子に嗣がれ
風光る駐輪場の愚痴の会
終日の両目ウインク花粉症

笹本啓子

鈴木玲子

杉浦理恵

腰反らす媼の白髪花ミモザ
うららかや水を揉みをる亀の肢
住職の大き耳たぶ春の雷

写真家の目線の遙か風光る
さざ波に消さるる一朵春シヨール
店先に「訳有りの花」春の虹

春泥を行くここより会津西街道
春泥の跡切れて徒涉湯檜曾川
春泥の重き山靴けぶる檜

竿撓み浮子が沈むや猫柳
谷中湖の野焼の煙遙かなり
春めくや上衣小脇の女学生

露の臺油の中で華になる
露の臺色よく揚げて一献す
露の臺ふと気がつけば臺が立ち

フリージア三本持ちて友来る
他愛なき言もひそひそフリージア
繰り返す投資の話フリージア

曲淵徹雄

野田静香

渋谷さいち

村杉清吉

梅澤輝翠

橋本京子

母の手に牡丹雪落つ車椅子
これといふ形見なき父春の雪
大試験背中をそつと母が押す

春雷の遠のきて今猫の声
東風吹くや武人埴輪の盾重し
炎かな緋木瓜に眼奪はれし

先人の句に酔ひ痴れる春の宵
雨上り春天狼の青さかな
漫ろ行く真白き梅に出合へたり

春三日月舳先にバッグ掛けやうか
鍋釜を磨き籠りの弥生尽
初桜また練り直す旅プラン

昨夜の雨今年も逢へた露の臺
ほろ苦き味なつかしき露の臺
行く雲やさ枝の隙に春の嶺

暫くは同居希望と嫁が君
天井裏又揉めて居る嫁が君
音沙汰のふつと消えたる嫁が君

千坂平通

からからと風の音する寒の入
囀やこぼれるほどの恋の歌
揺れて揺れて空掴むなり花辛夷

阿部幸代

木枯に背中押されて入院す
患者にも用事多々有り暮早し
退院や真つ先春の服買ひに

鈴木和子

骨壺と雛の部屋に通さるる
線香はあげぬ流儀や雛飾る
一人暮しの友は雛に癒さるる

森和子

看護士の声に目覚めし朝寝かな
春の風邪注射針から一滴
春昼や味を副ふるは万古焼

塩野久子

ビーグルの駆け込むトイレ春の雷
春シヨール夫は子犬とお留守番
ママ友のおしやべり会や春シヨール

水落守伊

霾や落陽掠れフェリー発つ
入り彼岸行き交ふ度の会釈かな
ホタルイカ満艦飾の身を投じ

菅原真理

瀬戸雄二郎

川島典虎

武田重子

鈴木藻好

菅原卓郎

鼓笛集作品評

大村 節 代

お迎へのバスにべそかく入園児
大きめの制服気にし入学す

笹本啓子

昨年は新型コロナナウイルスによって、多くの所で入園式や入学式が休止となったようだが、今年は何とか行なえたようで喜ばしい。

その入園式、入学式の子供達の姿が伝わる。お母さんしながみついて幼稚園バスに乗らない児、すぐ成長するので大きめの制服で我慢させられる子、それらの一齣を楽しく切り取る。

細き眉見つめゆるりと雛納

鈴木玲子

桃の節句、雛祭は五節句の内の上巳の節句である。年に一度、お雛様を箱から出して飾り、桃の花、白酒、菱餅等を供える。雛祭は女の子の祭りなので、終ったら早く元の箱に仕舞わないと、嫁入りが遅くなるという言い伝えがある。そこで雛祭りが終ると、日を置かずに雛納をする。掲句の上五、中七の表現が雛納にぴったりで、また来年と雛の顔を和紙で

鼓笛集巻頭（四月号）

私の好きな一句（自句自解）

西幅公子

郭公や妣とあるやな山の畑

幼い頃から母と一緒に山の畑でよく働き、野山も駆け回っていました。

郭公の鳴く声を聞くとあの日々が甦り、母を思い出します。今も自然が大好きで、私の体に染み込んでいます。

被う、その名残りの様が良く表現されている。

風光る駐輪場の愚痴の会

杉浦理恵

当節のお母さんは逞しい。電動自転車の前と後ろに子供を乗せて、急坂も何のその颯爽と追い抜いて行く。しかし、コロナ下の近頃は街角で井戸端会議をする姿は見かけない。なほ、駐輪場で「コロナ困ったね」とか、子育ての情報等を話したりして、気晴しをし、また子供を乗せて颯爽と帰るのでしょう。

句集喝采

近藤徹平

◆石井英彦「炎」

文學の森

著者略歴 昭和七年東京都生。昭和二十五年より七年間結核療養所入所時に所内俳句会に入門。昭和三十一年中島斌雄に師事。「麦」入会。現代俳句協会会員。令和二年九月逝去。

対島康子「麦」会長は巻頭に、本句文集は予科練、神風特攻隊を志した軍国少年が死病の結核を乗り越え、社会性俳句と妻となる人と出会って人生を切り開く自伝小説・詩集の青春立志篇と、著者の平成二年以降の「麦」作品より会長が選句した句集の完結編とからなると記す。表題「炎」は著者の長女石井由以子氏が著者の詩作時の筆名「藤平炎」より命名。

胸で受くべし氷柱千本と月光
月のビル未来の僕が歩いて来る
姿見を通り抜けると終戦日

第一句と第二句、自身の結核を研究し、試行段階であった肺切除手術を自ら要望し治癒させた逆境に強い著者の感性が生み出した句。第三句、終戦直前特攻基地にいた著者の戦後。

まぼろしはやがておもかげ花吹雪
相病みし春菜の君と相死ねず
生前のすべてを愛す月の眉

著者は病棟で親類の女性と同姓同名同年の女性患者に巡り会い、肺切除手術を推奨し、見事に本復を果たせた後に結婚し幸せな家庭を築いた。今は御兩人とも天国に憩う。合掌

◆阿部怜児「天守」

朔出版

著者略歴 昭和二十四年兵庫県神戸市生。平成四年社内俳句会入会、深見けん二に師事、同八年「花鳥来」入会、同二十四年第一句集「橋」刊。俳人協会会員。

青空を埋め辛夷の重ならず
散らばりて夕日の影を落椿
二つ目の鳴りてまさしく春の雷
寄るほどに泰山木の花の照り
蟪蛄の抱へ直して蜂を食む

深見けん二「花鳥来」主宰は本句集の帯で、第一句を「真正面から詠んで成功した写生句である。著者には情の深い句が多いが、写生句にも期待している」と記している。第二句から第五句まで、何れも写生に徹した秀句である。

白雲の懸る天守や初景色
石垣にはりつき城の煤払
父の撮るベンチの母や風光る
母逝くや雨に句へる金木犀

著者は「あとがき」に「四十余年の会社員生活を終えた矢先に父が亡くなり、郷里で一人暮らしを始めた母を見舞うため、頻繁に姫路に帰る日々であった。その母も令和元年に命を閉じた」と記す。第一句は本句集の表題句で姫路城である。第三句と第四句は亡き両親を詠んだ句。情の深い句に感無量。

春の吟行会の記

曲淵徹雄

春の吟行会は三月二十九日に、隅田川に近い本所地域プラザ・ビッグシップを会場にして行われた。予定されていた水明の行事のいくつかはコロナ禍により延期・中止となっていたので、しばらくぶりの行事句会である。四十二名の参加者が二句を投句し、句会が始まった。

開会の辞

青木鶴城氏

天気予報がよい方にずれて今日は吟行日和になりました。会場は、換気などの新型コロナウィルス感染対策に気配りをした部屋となっております。

主宰挨拶

今日は多くの方に参加していただき、うれしく思います。昨日の憂鬱な雨から一転して、春爛漫のよい天気になりました。

私事になりますが、この地域は、会社勤めの頃に担当した売上げの多い会社がある懐かしい土地柄です。

本会場は山中みどり監事の肝煎で地元ならではのご配慮をいただいています。ここを会場にして前に春の吟行会が行われたのは、私

の句帖によると平成二十八年三月三十日、その句会での私の成績がよかった縁起のよい会です。久しぶりの吟行会です。大いにお楽しみ下さい。

披講

保坂翔太氏 日高道を氏

主宰詠

風光の水くろがねの厩橋
花吹雪ビッグシップの船出かな

主宰選

三極

因 南指す海舟像を飛花落花 正信
地 花時の鬼平の町猫眠る いちい
因 春の朝ひんやり沈む相撲部屋 京子

超特選

大川の橋を語りぬ花の昼 和子
春風一過場所の名残りの立ち槽 月を
これぞ日本桜とビルと隅田川 公子
前挿の孔雀の揺るる木の芽どき 道
風光の下町繫ぐ鉄の橋 修

墨堤に誰の化身か散る桜
曳き波にゆるりたゆたふ江戸桜

特選

さくら桜でんでに揺るる装身具

コートの衿立てた横顔花の影

後継を待つ暖簾三代桜東風

切絵図に無いスカイツリーをうらけし

鬼平の緑を訪ね春暑し

屋形船の献立眺むるだけの春

路地入れば庭に窓辺に春爛漫

鯉はねて彩の崩れし花の池

浴塊の鉄柱黒し桜窓

大川を眺め幾年江戸桜

普通選

行く先を風に委ねて散る桜

墨堤や粗目の箆に桜餅

花を見て車の音を遠く聞く

いくつ橋潜れば海へ花筏

鉢植を飾る路地裏春日影

名吟に鎮むる疫病花いよよ

鎮魂の彼岸桜や慰霊堂

春のさざなみ声光り合ふ隅田川

撥ぬる鯉の水輪岸打つ木の芽時

花吹雪隅田河畔のカフェテラス

節代
鶴城

節代

喜恵

喜恵

月を

道を

和葉

和葉

マスミ

治江

かつ子

俊晴

俊晴

峰雄

みどり

俊晴

かつ子

徹平

昇

敏江

治江

マスミ

翔太

春光をかき混ぜ海へ船の滯
散り散りてもああ花筏にはなれず
春愁や舳ひの解けぬ屋形船

花の元祖鯛焼館熱し

花の塵銭湯開くは午後三時

花屑を吹き吟行の句帳繰る

春の風さざ波光る池面かな

麗かや光る隅田の屋形船

残桜や今なほ残る疲労感

安田庭園ハイウエー背に亀の鳴く

長閑なり白波ゆるく遊覧船

良き知らせ胸にずつしり朝桜

雨あがり墨田の町に風光る

桜咲くスマホかまへるマスクの目

本所通り自転車多し春の昼

隅田川は温み光るはちりあくた

花屑や富田木歩の果てし跡

風光る橋の向かうにスカイツリー

大川に海のにほひや春の昼

うららかや天まで届けスカイツリー

鉄橋の車窓に贈る花の景

春爛漫ゆるり大川橋づくし

海舟像に桜舞ふ中海を指す

風光る遊覧船ゆく隅田川

栄子
和葉

和葉

鶴城

鶴城

延昭

延昭

順子

順子

紀子

修

寛治

寛治

チアキ

チアキ

真理

真理

治子

治子

宣子

宣子

慶子

慶子

亜弥子

空青き本所界限風光る
花筏人情嗟を生みし橋

和子

和子

徹雄

徹雄

主幸講評

清記順にほとんどの句につき主幸から丁寧な講評をいただきました。講評後、三極と超特選七句に色紙が贈られた。

高得点者発表と賞品授与

一位 青木鶴城

二位 石山かつ子

三位 越田栄子

四位 曲淵徹雄

五位 諏訪サヨ子

六位 庭野峰雄

七位 山中みどり

八位 染谷正信

九位 大場順子

十位 網野月を

閉会の辞

この会場のビッグシップは、下町の地域のみなさんが気軽に集まれる場所を作ろうという思いから、発起人として立ち上げ、地域のみなさんと実らせた場所です。下町のみなさんの夢を乗せる船を意図するビッグシップという名前をつけました。

今日下町界限を題材にして多くの句を詠んでいただき、うれしく思います。

山中みどり氏

水明例会

第一例会（浦和）

茂木和子
延昭報

春点茶茶筌擦過の音に韻
春雷の後や衣桁の晴れ衣装
点々と波の置き行く椀貝
春光や一点睨む鬼瓦
春雷やダリの時計の針すすむ
冴返る点字ブロック探る杖
春雷の紛れこみたる街明り
米磨ぐ母慕ふ幼児春の雷
春雷やふと蘇る女優の名
春の雷内緒はなしが宙に浮く
点描のさし色は紅春の里
訓点なき漢詩に苦闘牡丹雪
春雷や懐中時計に誤差少し
購入の古書に訓点春めけり

光 弥
大場順子
マスミ
喜 恵
節 代
稀 香
チアキ
以上特選
光 弥
大場順子
延 昭
由紀子
マスミ
喜 恵
節 代

第二例会（東京本所）

山中みどり
太田絹江 報

満点も落第もなし春うらら
美人画の伏目仄めく春の雷
春雷や手を握り合ふ親子かな
旅立ちぬ子らの気概や春の雷
きりもなく砂積む遊び春の雷
口つぐむ甚句のガイド春の雷
春雷や回り舞台の奈落まで
これでもかと春雷らしくなき数を
春雷や遊びの声にかき消さる
手術後の点眼せはし寒き春
升酒の表面張力三の午
できる約束できぬ約束義士祭
義士祭無念晴らせぬ人のゐて
義士祭身捨つる程の何やある
長生さや一人ばつちの浅刺汁
春雲や休園中の観覧車
春の關山の中にぞ生まれけり
つつぶする椿を空に向けてやる
亀鳴くや嘘を拾ひに藪の中
人生は暗中模索座禪草
手を挙ぐる園児の列や義士祭

稀 香
岡野順子
理 恵
貴美子
徹 平
治 子
和 葉
チアキ
和 子
竺 仙
鶴 城
いちい
昌 弘
禮 子
絹 映
以上特選
いちい
禮 子
鶴 城
昌 弘
竺 仙

第三例会（東京）

五明昇
曲淵徹雄 報

春うらららスマホに夢中のぢいちかな
春雷や討ち入りの地の吉良の像
鈍色の空にとけいる花葉の黄
新駅を足下に見ゆ義士祭
義士祭や三河ことばの吉良蟲眞
中庸の心の程や春の月
ピアフの巷ミモザ烟れる港町
はるかより追伸と云ふ春の雪
戒壇廻り出れば明るき春の雪
春の雪文庫一冊読む間
甘味苦味香味ほのかに落る臺
靈峰を馬手に弓手に耕耘機
生垣の葉つばと松に春の雪
稚の笑み一つこぼれて山笑ふ
城址の石垣濡らす春の雪
春の雨オープンカーを駆る親爺
押し並べて穢土も浄土も下萌ゆる
剥がれくる空の甘皮春の雪
箔のごと春の雪舞ふ金閣寺
採用の電話を置けば春の雪
一場の乱舞きらめく春の雪

喜 久
大場順子
康 世
昇
以上特選
岡野順子
康 世
喜 久
徹 雄
萬 蝶
雅 夫
大場順子
理 恵
昇

第四例会 (浦和)

境 延昭 報
石井 喜恵

三月や納屋の鋤鎌ひかりだす
三月や文机の向き変へてみる
宍道湖の蜆一晚飼ひにけり
三月来勾玉色の風連れて
三月来青春の門ひらきたり
三月やおふくろといふ涙壺
三月のミモザサラダをご一緒
三月の光りを繋ぐビーズ玉

—以上特選

三月の牧場のひかりへ当歳馬
味良しと誉めて蜆の泥吐かず
三月の海眩しくてまぶしくて
みづうみの入日に溶くる蜆舟
三月や白さ眩しき膝小僧
蜆貝咎はなけれど泥を吐く
蜆売り桝におまけの一掴み
天守閣湖北の宿の蜆汁
三月や靴底軽きスニーカー
三月の光りに膨る雑木山
十三湊の水軍の夢蜆汁
調理場の隅の吹き蜆桶
さまぐれな三月の風やり過す

光 弥
マスミ
曆 文
順 子
翔 太
由紀子
光 子
喜 恵
以上特選
光 弥
寛 治
マスミ
昇
曆 文
順 子
延 昭

払暁や湖上にひかる蜆舟
湖広し舳先並べて蜆舟

でん治
喜 恵

第五例会 (浦和)

梅澤 佐江 報
河野はるみ

ゴンドラや魔法が解けて芽吹山
木の芽風朝餉の匂ひ運び来る
木の芽晴重たくなりし赤子抱く
秩父路の空押し上げて木の芽出づ
春の雪別れの言葉まなざしに
文を読む木の芽起しの静けし夜

—以上特選

播粉木の手慣れし音や木の芽和
待ち侘ぶる窓に淡雪すと消ゆ
裏山の風に誘はれ木々芽吹く
木の芽風はしやく園児の声も乗せ
木の芽張る樹海の息吹満身に
早立ちの轍の跡や春の雪
春の雪舞ふひとときの静心

水 尾
はるみ
美佐尾
理 恵
玲 子
義 子
佐 江
美佐尾
水 尾
水 尾
義 子
水 尾
玲 子
佐 江

若松例会 (京橋)

石田 慶子 報
正木 萬蝶

よなくもりナビゲーシオンには無い道路
古代史の謎に疲れて蜆汁
つちふるや吾が傾城の寝姿を

月 を
マスミ
鶴 城

長崎はからすみ色よ黄砂来る
籾や多肉植物越しの窓
「考える人」の思惑籾ぐもり
亡国の音おんの空耳籾ぐもり

—以上特選

籾れり家譜に書き込む簡体字
つちふるや恐竜騒ぐゴビ砂漠
雨落ちて籾の砂絵の流れけり
デイスタンスとりたる背に黄砂降る
黄砂来る渡航禁止のおふれ無く
籾ぐもりメガネ美人に変身す
籾やうねる大梁山の宿
つちふるや児にほんのりと蒙古斑
籾るや人は留まる国境線
鬱の日のコーヒータム籾ぐもり
貧なるや富める者にも黄砂降る
故郷や籾る宵の「夜来香」
夢の中に遊ぶ妖精春の風邪

はるみ
慶 子
萬 蝶
以上特選
マスミ
理 恵
慶 子
ひろこ
はるみ
俊 晴
月 を

関西例会 (大阪)

森本 早苗 報

青き踏む足裏に大地の鼓動かな
姫路城視野に残して青き踏む
桜鯛へ移り響声いちだんと
踏青やマリオネットの弾む脚

礼 子
早 苗
玲 子
敦 子

近ちかと生駒山稜青き踏む

ゆら女

朱雀門見えゐて遠し青き踏む

和子

蛇穴を出て音程をはづす笛

道子

——以上特選

永永無窮露出断層春疾風

早苗

羨道の重き礎石や春疾風

玲子

青き踏む青き移り香そのままに

礼子

鶯も漸く整ひ声千金

千津子

ジーンズの穴吹きぬける彼岸西風

敦子

菜の花に光残して日は西に

洋子

膝触れるセーラー服や葦濃し

智恵子

猿石も亀石も謎青き踏む

和子

劍豪の墓前に徳利燕来る

道子

尼寺より筍飯の匂ひくる

千枝子

三角の陣形すいと春の鴨

千世子

折れてまで勢ひありし山椒の芽

さわゑ

昔話あれこれ

容貌に絶望して身を投げた姫

兄と運命を共にした沙本毘売であるが、生前、帝から「そなたが結び固めた下紐は、誰が解くのであろうか。（誰が

后となるのだらうか）」と尋ねられて、沙本毘売は自分の代わりの后として美智の宇斯の王の娘、兄比売・弟比売の二人の姫を推薦していた。

（上代では、夫婦は互いに下紐を結び交わして、次に会うまで他人には解かせないと契る風習があった。）

垂仁天皇はその進言に従って、丹波の美智の宇斯の王の娘、比婆瀆比売、弟比売、歌凝比売、円野比売の四王女をお召しになった。しかし天皇は、上二人の姫だけをお召しになり、下の二人の姫を、醜いという理由で親許に返した。

円野比売は、「同じ姉妹の中で、容貌が醜いという理由で親許に戻されたところ近在の人々に噂されたらどんなに恥ずかしいことか」と悲しみ嘆き、丹波に帰る途中の山中で深い淵に身を投げて死んでしまった。

近隣の噂を気にして自ら死を選ぶとは、いかにも悲しく辛い話である。しかしこの話には現代に通じる文学性が読み取れる。

話は天孫降臨の時代にさかのぼるが、

醜さ故帰されても、反対に呪詛して相手に報いた痛快な話もある。

永遠の命を無くした天孫

大国主神の国譲りによって天孫降臨の準備は整い、邇邇云命は高千穂の峰に降臨した。そして、笠沙の岬に宮殿を造った。

ある日邇邇云命は美しい乙女に出会った。邇邇云命はすぐに求婚した。姫の父の大山津見神は喜んで、多くの献上品と共に姉の石長比売を添えて献上した。

邇邇云命は姉の醜さに怖れをなし、妹の木花之佐久夜毘売だけを留めて、姉は親許に返した。大山津見の神は、「私が娘二人と一緒に献上した訳は、石長比売がお側におれば、命のお命は、岩のように永遠でおられたことでしょう。木花之佐久夜毘売がお側におれば、桜の花が咲くようにお栄えになるでしょうと誓約をして献上しました。石長比売を返されたので、命のお命はさくらの花のように繁栄なされてはかないものとなるでしょう」と言った。

こういう訳で天皇の命は長久ではないのである。（丸山マスミ）

各地句会



山茶花 (浦和)

山笑ふ牧に牛追ふ声光る
トンネルを抜けて一気に山笑ふ
東雲のひかり一すぢ山笑ふ
吊橋の影もゆらゆら山笑ふ
残る雪よけて訪問友の家
入試終へホッケー再開山笑ふ
みどり児の笑顔に似たりクロッカス

マスマ
光子
しず子
泰子
美江子
清一
綾子

古はけた鏡台に置くひなあられ
白磁の大鉢木の芽和の緑
箸置きのうさぎ飛び出す木の芽和
木の芽和へ母の定番香り立つ
幕開けの柝の音にしゃんと春の宵
なじみのギヤラー閉ぢミモザゆつさゆつさ
祖母よりの播粉木三寸木の芽和

慶子
重弥子
由美子
史代
玲子
栄子
千春

あゆみの会 (浦和)

春雷にぎゆつと手を取る二人かな
小さき吾子両手を耳に春の雷
ラブレターそつと手渡し卒業す
風光る球打つ彼を目で追ひて
震へつつ吠ゆる子犬や春の雷
ずぶ濡れの猫のご帰館春嵐

山遊
重子
圭子
朋和
朋子
藻好

桜林句会 (大宮)
唇にとどかぬ笛や古雛
梅の宿おすべらかしとすれ違ふ
児を背負ひ鳥と戯る梅日和
煙草屋の店先飾るお福雛

知子
光子
光代
美佐尾

卒業期フルト吹く娘の鳴りやまず
ぜんまいの茹でる灰汁吹きこぼれ
しやばん玉吹いて幼に戻りたり
捨て杭の鷺春雷にたぢろがず
春雷や父の命日近づきぬ

正子
道子
税子
美子

櫻蔭句会 (浦和)

囀や紅茶揺らしてブランチを
宇宙船からメール届くや花辛夷
乳飲み児の手足によきによき花辛夷
囀や本曲輪跡しきりなり
溪流を分け入ればふと花辛夷
姫辛夷貫はれてゆく岫の琴
子らの声ひびく公園辛夷咲く
学び舎の時を刻みし大辛夷

真理
美智枝
公子
茂子
多美子
由紀子
道子
幸代

水温むゆつくり解く手の繃帯
水琴窟の音の軟らぎ水温む
野良猫の伸びの背中や水温む
欄干の影ゆるやかに水温む
うたかたの消えては生まれ水温む
ミモザの会 (横浜)
播粉木は伝家の宝刀木の芽和
わたくしの秘密の小道路の臺

喜恵
燈女
輝翠
チアキ
佐江
萬蝶
知子

朝東風や船宿でだす一夜干
風に聴く社の雅楽春の月
東風吹けば水本流へ迸しる
強東風や昼を静かに相撲部屋
桜東風やともづな解れたる和船
梅東風を総身に纏ひつつ散歩
雪解山冠木あらはる輿社
強東風に孕むテントの跳ねし音
東風吹けば合格祈願の札の鳴る
山童が里に戻りぬ東風の川

延昭
倭子
水尾
ます美
佐江
慶江
徹平
義子
美佐尾
翔太

見沼の春を女体神社が見守りぬ
自社ビールこよなく愛でて起つ春闘
梅東風の公園広場走る子よ
夕東風や防災無線上擦れり
白梅やこごだくしづか妻社

蘭の会 (浦和)

素うどんを門前で食ふ彼岸かな
山陰に光集めて辛夷立つ
啓蟄や光の中を初飛行
強風に揺るる辛夷や花は宙
啓蟄や堤斑になりにけり
風光るドガの素描の踊り出す
下校時のグーのグリコや辛夷咲く

水明小川句会 (小川)

暖かや鉦はずして深呼吸
歎もちて畝も揃ふや藪椿
春浅し色付く木々に歩もゆるむ
風に揺る若木の梅に花一輪

水明熊谷句会 (熊谷)

忠男 幸代 美子 卓郎 かつ子 京子 和代 孝男 文子 信一 月を 鶴城 みや 和子 綾子 栄子

草千里天地を焦がす野焼の火
ワクチンの順番待つ木の芽雨
天と地を結ぶ春なり星煌煌
春眠や母の鼓動か厨音

芽吹句会 (浦和)

春の雨だらりの帯に切り火かな
川下り棹つく岩に花菫
春雨やささやき初むる庭の木々
春の雨畑に土に色戻る
相生の松の根方や葦草
奥入瀬の飛沫とどけり葦草
春雨に眠りを醒ます大地かな

円卓の会 (浦和)

平飼ひの雌鶏三羽花辛夷
山葵田の水車の軋む音長し
初蝶や不意を衝かたる焼米坂
初蝶と目が合ったかに思はれて
恋患ひか遅日なること怖ろしく
そよ風にきらめきを添ふ早瀬春

若鮎の会 (浦和)

芋植うる農事暦を記す夜
種芋の無駄なる数を数ふ夜
ちやん付けて呼び合ふ仲間山笑ふ

徹平 正行 和子 茂子 富子 玲子 千重子 千アキ ひろこ 道を 翔太 静香 道香 輝翠 月を 鶴城 芳江 喜夫 稀香

種芋や庭の二畦を母が植う
山笑ふ流るる水の透きとほる
種芋を植うる畑の土黒し
背を延ばし朝の体操山笑ふ
Iターン明日発つ友に山笑ふ
田舎より土のかぶりし種芋を
ゆく道に木漏れ日の満つ笑ふ山
種芋や灰汁にまみれる鈍の鉾
ひと年の速きを思ふ桜かな

野ばらの会 (浦和)

蛤の幽かな吐息夜の静寂
成長せし形彷彿と苗木市
手招きで夫呼ぶ旅の植木市
苗木市生り物の木を記念樹に
呼びこみの値下げ楽しむ植木市
苗木買ふあと十年は生きねばと
蛤の目当ての模様争奪戦

水明鬼石句会 (鬼石)

つくしんば突き突かれ犬の鼻
厄除けの火祭り春の時雨なか
雨粒のコロリと落ちて芽木の朝
白木蓮顔まで白く咲き誇る
蕾の玉解くくれなるのやぶ椿

みえこ 順 早苗 万美 かね子 亮一 月を 鶴城 秀子 和子 夏江 栄子 治江 茂子 みき子 和子 聡子 ナヲ子 洋子 紀子

コクーンシテイカルチャー俳句教室 (さいたま新都心)

春めけり破れジーンズ闊歩する

春めきて塞ぎの虫が去る気配

ソプラノの胸ふるくよかよ山笑ふ

天ぷらや苦味ほどよき露の臺

三姉妹こいさんどの子路の臺

針穴に糸のするりと春めけり

春めくや櫟林に鋸の音

木曾馬の高き嘶き山笑ふ

りそな俳句会 (浦和)

スキップの姉妹揃ひの春の服

百姓を継ぎし末の子風光る

瑠璃色の広きバンダナ風光る

風光る臉をとちて深呼吸

春服を着てあげたし道祖神

子規の夢打つて走つて風光る

リクルートスーツの街に風ひかる

風光る沖を遠見の観覧車

青葉の会 (浦和)

卒業式母参列の日の遠し

初桜一輪からの生き様を

良き友に会へし学び舎卒業す

山里の穏やかなるや初桜

延昭

俱子

美枝子

淑子

俊晴

千恵子

正信

昇

寛治

雅夫

曆文

京子

久美子

建治郎

道

マスミ

美紗子

真理

美智枝

美子

卒業生去りゆく姿校門に

稚児の齒今朝見付けたり初桜

川沿ひにかすか一輪初桜

マネキンに魅せられ手にす春の服

水あかり人恋しかりけり初桜

若狭水明会 (若狭)

洋洋と空は雲雀の大舞台

式終へていい日旅立ち初雲雀

揚雲雀生徒あふるるガキの頃

仲春や昭和の唄が生きてをり

百歳の盆栽凜と木の芽張る

アスリートのジャンプの高さ揚雲雀

米粒に似たる手触り桜の芽

正面に沖の石置き木の芽道

父の文字残りしバット揚雲雀

好調の声充つる空揚雲雀

旧道はなつかしきもの木の芽吹く

たかな俳句会 (川口)

さざ波のそつと寄せくる桜貝

へその緒の桐の小箱に桜貝

春雨や訪ね来し道迷ひ道

地球儀を気怠く廻し春の雨

遠き日の淡き手のひら桜貝

ニコライの円蓋やさし春の雨

公子

啓子

洋子

和子

輝翠

初花

和風

白鷺

冬至

保人

鼓

郁子

寛久

ことは

祥子

想子

柔らかく潮満ちきたり桜貝

優しさの裏の秘めごと春の雨

春雨やパン屋までゆく旅ごころ

金婚のグラスに添へて桜貝

春雨や烟る港を人力車

さざきサークル (浦和)

春の星ツーツーツと宇宙船

懸想文残して君は春星に

希望の的浜通りにも春の星

春の星来客迎へる鬼瓦

春の星沖へ出て行く漁舟

夜空行くへりコプターや春の星

明日発表窓から拝む春の星

蝌蚪の会 (浦和)

石庭や水輪に浮ぶ桜かな

せせらぎを聞きてふくらむ猫柳

行間に浮かぶ眩き水温む

鳥の巢や運び集めし赤い紐

鳥の巢や空き家の雨戸塞ぎをる

鳥の巢や鳥の集団旋回す

庭先の残花を惜しむ声聞ゆ

鳥の巢や生きてあるまま幾度も

水温む野の焦げ跡に少し青

巣づくりを何れ為す奴為さぬ奴

義子

鶴城

真知子

水尾

静香

喜代子

俱子

タイ

和枝

啓子

かつ子

和子

ひさの

朝香

礼子

元美

信一

るみ子

宣子

さち子

鶴城

月を

皇月の会 (浦和)

ままごとの馳走は紫雲英鳥の鳴く
小さき手が花束にせし蓮華草
雛あられ男の子も食ぶる佳き日かな
風渡る紫雲英の果てにちぎれ雲
青空のげんげ畑でコッペパン
磯遊び岩を飛んでる子の声は
へら竿に当りの予感水温む
太陽の季節待ち侘ぶ磯遊

新樹の会 (浦和)

朝霞ゴルフコースの遠き声
言の葉も急に大人び春休
母親に笑顔の戻る春休み
霞立つ裾野は広き富士の山
春めける五又路の供花もあざやかに
紅梅や天平の里彫よかに
朝霞昨夜のことの断片を

りんどう俳句会 (浦和)

袖を振る蒲生野の丘陽炎へる
鉄剣の出でし古墳ぞ陽炎へる
陽炎やゆらり駱駝の知らぬ道
かげろふや出自不詳の猫もらひ
陽炎や真つ赤なボルシエ浮いて去る

珪子
順子
紀子
静香
孝磨
久子
曆文
さいち

京子
道子
平通
韶子
清吉
鶴城

紀子
正信
弘夫
卓郎
君夫

かげろへる白衣観音宙に浮く
陽炎に憑かれ遠のく赤い靴
飛鳥路の亀石の亀鳴くやいつ
釈迦院の石段三千亀鳴けり
陽炎や宛先不明で書が戻る
亀鳴くを確と聴きけり猫と我
陽炎の中へ押しゆく車椅子
陽炎よりひらひら出で来一輪車
和歌山水明句会 (和歌山)

陽炎に子を見失ふ石舞台
宙吊りの鯨の骨格風光る
散りてなほ色深めたる紅椿
歌声の響く校舎や風光る
門限に遅ることなく春の猫
おはようと呼べば飛び立つ春の鳥
魚河岸に太き声飛ぶ初鰯
日永人いどむ数独星五つ
鶴川山百合句会 (町田)

春の風邪こんな寝たのにまだ眠し
かたばなや還暦過ぎて一目惚れ
コロナ禍に傾く暗鬼の風邪薬
夕支度すませてよりの春の風邪
白梅や伏し目が癖となりし我
天井の染みみてゴロ寝春の風邪

治子
徹雄
利子
翔太
寛治
サヨ子
典子
順子

和子
道子
千枝子
千世子
満耶子
さわゑ
洋子
迪代

雄二郎
月を
喜久
史代
広子
知子

春の風邪窓辺に積みし時代物
春の風邪妻の所望の玉子粥
恋患ひ・花粉症・否春の風邪
片栗の花見つめればふるへをり
春の風邪夢の辻褃あはぬまま
櫛の会 (浦和)
頬に手に砂はね上げて潮干狩
汐干狩沖にフェリーの伊勢の海
汐干狩潮の香満つるバスの中
桜草シャッター音のあちこちに
潮干狩り遊んでばかり腕白子
楽しげな下校児の笑みさくら草
野生種の楚々とゆれをり桜草

珊瑚の会 (浦和)
桜爛漫聖火リレーの出発す
桜八分晩年といふ成長期
海原原帰帆うながす鱒東風
逆さる水の匂ひや初桜
鐘の音や枝垂桜の傘の中
神域の絵馬の重なり桜東風
さくらさくら一〇三歳の天寿かな
幹太く長たる風情家桜
雲雀東風地産地消の市歩く
花の風どこでも止まる村のバス

由美子
千春
萬蝶
理恵
玲子
富子
彰二
千重子
祐之
克之
朋子
治子

水尾
マスマ
喜恵
かつ子
水尾
昇
恵子
史代
和子
和葉
節代

神戸大池句会 (神戸)

木の芽吹く武蔵の庭の大櫓
露のたう終の恵みの朝餉かな
連翹の枝はあちこち憚らず
啓蟄や老眼大学再開す

光が丘俳句教室 (東京)

最初はグー今チヨキくらゐ花辛夷
天井を視つめ直立卒業子
骨つばを仕上げ陶芸卒業す
猫の恋押しかけ喰らふ猫パンチ
一声を蝦夷地に落し帰る鶴
いくたびも起立着席卒業式

水明大阪俳句会 (守口)

冴返る窓辺に小さき蛾のむくろ
春マスクおしやれを競ふ楽しみも
我が友の影ひとつ春日向
囀りの高みより降る終の家
北国に単身赴任鳥雲に
露の臺無口が唇ひらさけり

柿の木塾 (浦和)

朝寝して残る寿命を食ひつぶし
ミモザ咲き男にもある妬心かな

玲子
礼子
千津子
早苗

春耕の畑の全景振り返る
月おぼる舫ふ木の船鉄の船
浅蜷に酒惜します我は禁酒中
体内の声耳すます春の夜
満開より七分に風情お花見へ
料峭や喉を宥める花梨ジャム
故郷の遠近ひかる猫柳

水明松本句会 (松本)

道すがら椿の落花長屋門
巢立鳥しきりに泣きて親を呼ぶ
桜咲く今年も遊具規制線
陽の光浴びて華やく梅の花
相弟子とかけ合ふ琴や光悦忌

節代
水尾
和葉
恵晴
俊晴
昇
和子

ゆら女
洋子
智恵子
人美
和子
敦子

☆ ☆

光弥
かつ子

水明通信

見沼の春

さいたま 本橋稀香

俳句を始めて早や六年となりました。
ジョギングが日課の夫に誘われて、毎週
日曜日は自宅から徒歩20分の見沼西縁の
土手を散歩しています。殊にこの時期は
桜の開花が真近いので、蕾の様子を観察
しながら土手を歩いています。昨日東京
の開花宣言があり、見沼も今週中には咲
き出すことでしょう。

コロナ禍の中わざわざ名所に出掛けな
くても桜が身近にあり幸せです。早朝の
ウォーキングは土手の彼方まで満開の桜
を一人占めしたような心地になります。
また足元には、水仙・犬ふぐり・蒲公英
などの小花、遠景には連翹・木瓜・雪柳
など色とりも鮮やかです。

この景色を俳句に詠みたいと思いつつ
この時期を過しています。

水明全国大会のご案内

- [と き] 2021年6月29日(火曜日) 12:00～16:30
受付 11:30
- [ところ] 浦和駅東口パルコ9階第15集会室
ロイヤルパインズホテル浦和からパルコに変わります。
- [行 事] 水明賞・季音賞・新珠賞の授賞
新誌友紹介者の表彰。季音同人、新同人の発表。
兼題入選句の発表と授賞、講評等。
- [会 費] 3,000円(軽食・お茶付き)
参加費を添えて発行所総務部へお申し込み下さい。(申し込みは5月1日～6月15日)にお願い致します。
コロナ下で、定員削減の指導により定員は先着66名となります。
担当：全国大会実行委員会

毎月25日発売
定価1000円(税込)

月刊俳句界

2021年6月号

特集

関西俳壇の歩み 宇多喜代子

○関西俳人競詠

山下美典 柴田多鶴子 花谷清 中田剛

恒藤滋生 和田華凜 前田攝子 富吉浩

茨木和生 塩川雄三 手拝裕任 桑島啓司

○関西若手ビッグアップ! 塩見恵介

○関西の季語の面白さ 飯屋賢一

特別作品30句

渡井恵子

タラシエ 俳句界NOW 高橋将夫

俳句の「余白」の魅力

◎俳句における「余白」とは 広渡敬雄

◎余白を感じさせる名句 田島健一

◎余白の作り方 自句自解

増成栗人 岩淵喜代子 中村正幸

澤好摩 山下知津子 しなだしん

津川絵理子 黒澤麻生子

※セレクション結社「方巴」岡村千恵子

私の一冊

佐高信の甘口でコンニチハ!

対談

高橋竹山

(三味線奏者)

「俳句界」投稿欄 一流選者14名!
日本一充実の投句欄

※一部変更の可能性があります。



株式会社 文學の森

お求めは... ●〒169-0075 東京都新宿区高田馬場2-1-2 島ビル8F
TEL.03-5292-9188 URL <http://www.bungak.com>

水明全国大会 兼題句募集

水明全国大会の兼題句を次のように募集します。ふるって御応募下さい。

兼題

「春の夜」（はるのよる）

春夜・夜半の春・春の宵・春宵・宵の春

「野遊」（のあそび）

山遊・野がけ・春遊・ピクニック

※「春の夜」「野遊」は右の季語で詠む事

「話」詠込み

※「話」は春の季語を入れて詠む事

例句 土筆の袴とりつつ話すほどのこと

大橋敦子

桃咲くと鉄線の棘へだて話す

岡本 眸

句数

通じて二句。（一組）

・一題で二句でも、両題込みで二句でも可。

・組数は制限しない。

出句料

一組につき千円。

締切

五月十日（発行所必着）

※投句用紙（水明三月号・四月号に添付）使用のこと。コピーも可。

風 声

○現代俳句三月号——「現代俳句の風」欄

靈園に千の角あり沈丁花

大塚茂子

薔薇の芽のくれなゐを解く夜の雨

越田栄子

漕ぐほどにふらこ揺れて空揺れて

野平美紗子

クリオネの心音高くときめいて

丸山マスマ

海峡は達磨夕日ぞ涅槃西風

田寺玲子

○天塚（宮谷昌代主宰）

三月号——「珠玉一句」欄

身に余る初夢しかも膝枕

鬼之介

○くぢら（中尾公彦主宰）

三月号——「受贈俳誌美術館」欄

荒行の火の粉の行方冬の月

鬼之介

○新月（松田碧霞主宰）

三月号——「受贈俳誌紹介」欄

身に余る初夢しかも膝枕

鬼之介

○太陽（柴田南海子主宰）

三月号——「一誌一耀」欄

マスクして吾が福耳のたしかなる

鬼之介

○玉梓（名村早智子主宰）

三・四月号——「他紙拝見」欄

身に余る初夢しかも膝枕

鬼之介

○菜の花（伊藤政美主宰）

三月号——「諸家近詠」欄

マスクして吾が福耳のたしかなる

鬼之介

○飮（山本一步主宰）

三月号——「受贈誌の一句」欄

風に香を里に野菊の盛りなり

越田栄子

（日高道を抄出）

俳句

6月号
予告

5月25日発売
予備950円(10%税込)

特別作品—矢島渚男・山口昭男・岸本尚毅

推敲の現場

よりよい一句にするために効果的な推敲方法を、現代俳人のリアルな推敲過程と、名匠が推敲した記録から学びます！

大特集

▼総論 推敲では何が行われているのか……朝妻力

▼各論 私の「推敲の現場」

……武藤紀子／秋尾敏／今井肖子／津高里永子／河原地英武／今瀬一博／大西朋

▼名匠の推敲を見る……中村草田男・石田波郷・金子兜太

第55回 蛇笏賞発表！

●受賞のことは ●選評 ●自選50句抄 ほか

俳句の水脈・血脈
平成・令和に逝つた星々……角谷昌子

論評 文学的な、いくつもの武蔵野……赤坂憲雄

新連 評
※内容は変更になる場合があります。

電子版同時発売！ 電子版は「BOOK☆WALKER」(<https://bookwalker.jp/>)など電子書店で購入できます。

発行 角川文化振興財団 発売 株式会社KADOKAWA <https://www.kadokawa.co.jp/>

水明発展基金御礼
(敬称略)

— 令和三年三月三十一日現在 —

原田 想子	30	青木 鶴城	2
遠西 勢津子	3	越田 栄子	1
井口 俊晴	9	鈴木 和子	1
岡野 順子	10	多根 敏江	3
山戸 美子	3	日高 道を	2
飯田 忠男	10	保坂 翔太	1
福田 千春	20	曲淵 徹雄	2
石山 かつ子	10	太田 絹映	5
野田 静香	5	本橋 稀香	2
山口 富子	3	河野 はるみ	2
春の吟行会		福田 藤十郎	9
山本 鬼之介	1	松田 朋子	3
柚木 治子	5	— 合計 142 口	

最近の — 座談会 —
名句集を探る

司会 齋藤慎爾
筑紫磐井
辻美奈子
山本 潔

照井 翠 『泥天使』
杉浦圭祐 『異地』
神野紗希 『すみれそよぐ』

※巻頭二句

安西 篤

※好評連載
藤枝リュウジ

仙田洋子

五七五の散歩道
筑紫磐井

吉田千嘉子

俳壇観測

鹿又英一

坂口昌弘

橋本喜夫

忘れ得ぬ俳人と秀句

伊藤康江

青木亮人

※今月の華

俳人の響き
句の手触り、
俳人の響き

山田真砂年

大西 朋

赤羽根めぐみ

俳句へのまなざし
神作研一

※その時、俳句手帳

手のひらの江戸
— 古典籍を旅する

日下野由季

藤村公洋

※俳句と短歌の10作競詠

俳句のつまみ

小島 健

二ノ宮一雄

光本恵子

一望百里

俳句四季
Haiku Shiki

2021年6月号

5月20日発売
定価1000円(税込)

http://www.tokyoshiki.co.jp/ 東京四季出版

〒189-0013 東村山市栄町2-22-28 ☎042-399-2180

後記

今月は、水明賞・季音賞・新珠賞の各賞を受賞された方々のお喜びの声を特集しました。会員皆様は受賞された方々に、受賞おめでとうと申し上げましょう。

本号九六頁にご案内通り、六月二十九日に、浦和バルコにて、全国大会を行なう予定です。その折に、受賞された方にお目にかかって直接お祝を申し上げられると思います。尚、全国大会の兼題句の応募は、五月十日締切です。外出もままならない状況下では、なかなか俳句を詠むのは、大変な事と思いますが、投句がまだの方はどうぞご参加下さい。

今年の新珠賞は三名の方に決まりましたが、例年より応募が多く、予選を通過した作品も多くて、激戦でした。俳句を始めて何年も経

たない方が、十五句を揃えるのは本当に大変な事と思います。それを果敢に挑戦され、応募された方に、敬意を表します。今から準備されて、来年の応募、再応募をお待ちしています。

「春の吟行会」が八六頁の曲淵徹雄氏の報告通り、楽しく開催出来ました。久し振りの吟行会でしたので、参加された方々は輝いて楽しそうでした。ところで吟行会のビッグシップは、雪欄の山中みどりさんが、地域の皆様と役所に働きかけ、立ち上げて会長をなさっている施設です。昼食はここで働く地域の方々の手作りのお弁当。稲荷鮓と副菜の折箱、それに温かいお茶をお代りして出し頂き、本当にほっこりしました。山中みどりさん初めビッグシップの皆様ありがとうございます。

(節代)

今月のはてな？

- 古筆見 (こひつみ)
- 偈 (げ)
- 風信子 (ヒヤシンス)
- 梯姑 (でいご)
- 喧喧諤諤 (けんけんがくがく)
- 翠轡 (すいらん)
- 剩 (あまつ) え
- 修那羅 (しゆなら・しよなら)
- 徒涉 (としょう)

82 60 55 52 45 39 25 8 6 頁

水明発行所受付時間

曜日：(月・水・金)
時間：午後1時～午後5時
(火・木・土・日・祭日は休み)
水明の行事と重なった時は休み
(上記の時間には係がおりますので、
ご用の方は 時間内にお願います。)

水明

令和三年五月号
通巻一〇八八号
令和三年五月一日発行

発行人

山本 鬼之介
〒330-0073 さいたま市浦和区元町一丁目一八
電話 048-1886-1600三

発行所

水明俳句会
〒330-0064 さいたま市浦和区摩訶四丁目二二
電話 048-1822-1474一

誌代

半年分 六、〇〇〇円
一年分 一二、〇〇〇円
同人費(誌代を含む)
一年分 二四、〇〇〇円

季音同人費(誌代を含む)

一年分 三〇、〇〇〇円
振替〇〇一七〇〇〇一五三三九三

印刷所

中央美版

季音抄

山本鬼之介

眼裏に黒揚羽棲む春の夢
きりもなく砂積む遊び春の雷
相弟子とかけ合ふ琴や光悦忌
相向かひ羽びんびんと鶴の舞
耕人のときどき天を仰ぎ見る
桜貝波の工房より生れし
望郷の江戸の端くれ春の虹
能のシテ振り向きざまに春の雷
姫路城視野に残して青き踏む
朱雀門見えぬて遠し青き踏む
ピアフの巷ミモザ烟れる港町
三月来雑木林は鹿毛色に
木の芽張る樹海の息吹満身に
亡国の音おんの空耳霾もぐもり
初虹の見ゆる独房格子窓
大東京を東の間抱き春の虹
調律の仕上げはカノン二月尽
三姉妹こいさんどの子露の臺

永野史代
西山貴美子
波多野寿子
星野和葉
茂木和子
矢作水尾
小倉倭子
柚木治子
森本早苗
十倉和子
藤澤喜久
高島寛治
井上玲子
正木萬蝶
近藤徹平
梅澤佐江
松井由紀子
井口俊晴

次の原稿を募ります。随時発行
所宛、ふるってお寄せください。
なお掲載については、編集部にお
任せねがいます。

▼一句鑑賞

「水明」内外の最近の佳句を気軽
に鑑賞してください。要領は、

二百字詰原稿用紙一句一枚以内
(句に雑誌名、句集名、刊行月
を付す)

▼散歩道へ身辺トピック

読んで楽しい、ちかごろ身辺に起
きた面白い話題、めずらしい経験
などの情報をお寄せください。

要領は、

二百字詰原稿用紙一件一枚以内
(題をつけて)

▼山紫水明へ随筆

テーマ：自由

枚数：二百字詰原稿用紙五枚半

以内

水 明 抄

山本鬼之介

庭の色動き出したり露の臺
 早春やただなんとなく銀座まで
 涅槃西風夜の塔婆は話し出す
 山独活のもてなしに酔ふ峡の宿
 寒星や秘湯の宿の俳談義
 故郷に住む我の分身山笑ふ
 冬の陽や湯気もうもうと檜皮葺き
 神名備の筑波嶺仄か冬満月
 春入り日人情劇の一座行く
 春シヨールひかへめなれど艶ぼくろ
 けだるげな夢二のをんな猫柳
 早春の梅の古木を慈しむ
 妹と酌む目刺のわたの沁み透る
 早春や墨の匂ひの封ひらく
 京菜食み一言なれど京ことば
 春めくや空のだんだん低くなる
 大なはの八の字速し春はじめ
 日溜りにひねもす一人猫柳

横山君夫
 渋谷きいち
 西幅公子
 原田秀子
 染谷正信
 越田栄子
 和田仁八郎
 保坂翔太
 反町修
 曲淵徹雄
 笹本啓子
 塩野久子
 鈴木和子
 神田治江
 新曆文
 青木鶴城
 野田静香
 日高道を

水明例会案内	句会名	日 時	会 場	指 導 者	幹 事
	第一例会	第1日曜・午後1時	浦和コミセン (パルコ 10F)	山本鬼之介	茂木和子 境延昭
	第二例会	第3金曜・午後1時	本所ビッグシップ	網野月を	太田絹映
	第三例会	第1月曜・午後1時	京橋区民会館	山本鬼之介	五曲明昇 淵徹雄
	第四例会	第1木曜・午後1時	浦和コミセン (パルコ 10F)	椎野美代子	境延昭 石井喜恵
	第五例会	第3火曜・午後1時	水明発行所	山本鬼之介	梅澤佐江 河野はるみ
	若松例会	第1土曜・午後1時	京橋区民館	山本鬼之介	石田慶子 正木萬蝶
	関西例会	第3日曜・午後1時	守口市文化センター	大橋勉代	森本早苗

水 明 令和三年五月一日発行 毎月一日発行

(第九十四巻 第五号) 定価 一〇〇〇円